

格の素性分解によるフィンランド語構造格の分析

岸田泰浩

1. はじめに

文の中で名詞項が担うべき格形式がどのようにして決定されるかについて、その理論的研究の歴史は長い。とりわけ格が豊富なことで知られるフィンランド語においても、言語研究の主要な対象となっている。しかし、話題に上るのは、数の上で大半を占める、いわゆる「意味格」ではなく、ごく少数の「構造格」ないしは「文法格」と呼ばれるものである。「主格」、「対格」、「属格」などの一般的な構造格に加え、この言語には、「分格(partitive)」と呼ばれる‘珍しい’格が存在し、議論的となることが多い。

分格については、Belletti(1988)が非対格動詞(unaccusative)の理論的考察で取り上げて以来、その存在は広く知られることとなった。フィンランド語で多様な用法を持つ分格は、その基本的な機能を探求する研究のほか、アスペクト・否定・数量などの意味に深く関わるために、意味格であるのか、それとも、構造格であるのかが議論されることも少なくないが、主格や対格と交替する環境においては、構造格という枠の中で扱うのが妥当であると思われる*1。

一方、主格や対格についても、興味深い振る舞いがフィンランド語で観察される。特に顕著なのが、対格形の目的語がある種の環境で主格形と同一の形態に替わる現象であり、どのような場合に、そして、どのような過程でこの「主格形」が現れるのかという謎を解明することに関心の多くが寄せられている*2。

本稿は、Kiparsky(2001) および Wunderlich(2000d)で展開されたフィンランド語の構造格に対する分析を背景に、両者が導入した格の素性分解の考えを援用しながら、具体的な点では両者と異なる、新たな分析を試みるものである。

*1 Heinämäki(1984)、Kiparsky(1988)、Vainikka(1989, 1993, 2003)、Vainikka & Maling(1996)を参照。また、Hakulinen & Karlsson(1979:182)によると、統計上、目的語の44%が分格形で標示されている。目的語全体の17%が「主格」形で、16%が対格形であることと比較して、少なくとも頻度上は分格がもっとも無標の目的語の形であると考えられる。

*2 Timberlake(1975)、Milsark(1985)、Taraldsen(1986)、Vainikka(1989, 1993, 2003)、Maling(1993)、Toivainen(1993)、Nelson(1998)、Kiparsky(2001)、Asudeh(2003)を参照。

2. 構造格の分布

フィンランド語の伝統的な文法では、一般的に構造格(文法格)の体系を以下のように考える*3。

(1)

	普通名詞 'bear'		人称代名詞 'you'	
	単数	複数	単数	複数
主 格	karhu	karhu-t	sinä	te
対 格	karhu-n, karhu	karhu-t	sinu-t	te-i-dä-t
分 格	karhu-a	karhu-j-a	sinu-a	te-i-tä
属 格	karhu-n	karhu-j-en	sinu-n	te-i-dä-n

この言語の特徴は、名詞項の標示がいくつかの格形の間で交替することである*4。

- (2) a. Tuon karhu-n / karhu-t / häne-t.
bring-1SG bear-ACC bear-PL.ACC she-ACC
"I'll bring the(a) bear / the bears / her."
- b. Tuo karhu / karhu-t / häne-t!
bring-IMP bear-ACC.II bear-PL.ACC she-ACC
"Bring the(a) bear / the bears / her!"
- c. En tuo karhu-a / karhu-j-a / hän-tä.
NEG-1SG bring bear-PART bear-PL-PART she-PART
"I won't bring the(a) bear / the bears / her."
- d. Etsin karhu-a / karhu-j-a / hän-tä.
seek-1SG bear-PART bear-PL-PART she-PART
"I'm looking for the(a) bear / (the) bears / her."

主語は概して主格で標示される*5が、目的語の格は様々な要因により異なった形で表される。(2)a.のような肯定平叙文では、名詞の種別に関係なく、目的語が全て対格になる。ただし、対格を示す接辞の形態は、名詞の種類に依存する。普通名詞の単数は -n、複数は -t で標示され、人称代名詞*6は、単数・複数ともに、対格は接辞 -t

*3 伝統文法における格体系全般については、本稿末の Appendix 1 を参照。

*4 構造格の基本的な分布は Appendix 2 にまとめてある。フィンランド語には、冠詞がなく、また、3人称代名詞に男女の別がない。逐語訳で用いる主な略号は次の通り: -0=0格, -N=N格, -T=T格, -P=分格 partitive; SG=singular, PL=plural; COND=conditional, IMP=imperative, INF=infinitive, PASS=passive, PTC=participle。他の格の略号については、Appendix 1 を参考にされたい。

*5 ただし、1人称および2人称の主語代名詞は、省略されるのが普通である。

*6 1人称代名詞、2人称代名詞、人を表す3人称代名詞、および、人を対象とする疑問代名詞がこれに含まれる。指示代名詞や物を対象とする疑問代名詞等は普通名詞と同じ変化をする。

をとる。ところが、(2)b.のように、ある状況で単数普通名詞の目的語が(伝統文法で「第2対格」と呼ばれる)接尾辞のない対格で現れる。また、否定文(2)c.や未完結相(unbounded)の述語(2)d.では、すべての種類の目的語が分格形で標示される*7。

接尾辞のない対格が現れる「ある状況」は、次の「規則」で表される*8。

(3) Jahnsson's Rule (JR):

Verbs which have no overt subjects govern the endless accusative, verbs with subjects govern the *-n* accusative.

「"overt subjects"が存在しない」ということが何を意味しているのかは厳密に定義する必要があるが、以下のような構文がそれに相当する*9。

(4) a. 不定人称受動文*10

Siellä	nähtiin	karhu	/	karhu-t	/	häne-t.
there	see-PASS.PAST	bear.ACC.II		bear-PL.ACC		she-ACC
"A bear / The bears / She was(were) seen there."						

b. 命令文*11

Tuo	karhu	/	karhu-t	/	häne-t!
bring.IMP	bear.ACC.II		bear-PL.ACC		she-ACC
"Bring the(a) bear / the bears / her!" (= (2)b.)					

JR の疑問点のひとつは、言及された2つの対格形が本当に対格であるかどうかという点である。例えば、表(1)によれば、 \emptyset (ゼロ)接辞と *-n* 接辞は、同じ対格の異形態ということになるが、一般的に異形態は音韻ないしは形態的な条件を前提としており、(3)で述べられているような統語的な条件が関わるのは普通でない。そして、もっとも大きな疑問は、その形態の交替にはどのようなメカニズムが働いているのか、ということである。

*7 注1も参照。

*8 Kiparsky(2001:317)を参照。cf. Jahnsson, A.W. 1871. *Finska språkets satslära*. Helsingfors: Finska Litteratur-sällskapets tryckeri.

*9 非定形節も同様な状況を示すが、その目的語の格形の分布は、主節との関係で多少複雑である。これについては4章で詳しく検討する。

*10 不定人称受動文では、元の目的語が主語に昇格しないと分析され、そして、自動詞からも派生可能である。動詞は人称変化せず、単一の形式しか持たない。英語の *by* 句のように動作主を表すこともできず、基本的に不特定の人物が含意される。また、口語体では1人称複数(能動)の形式に代わって用いられる。不定人称受動文の詳細については、Shore(1988)を参照。

*11 1人称および2人称の命令文のみ。3人称の命令文では、単数普通名詞の目的語は「第2対格形」にならない。

本章では、抽象格(abstract case)と形態格(morphosyntactic/morphological case)とを峻別することにより、例文(2)に見られる格の交替が原理的に説明できることを論じる。同時に、表(1)に示された従来の格体系とは異なる新しい構造格の体系を提示する。

2.1. 抽象格と形態格

構文(4)に見るような、接尾辞のない目的語の形が一体何なのか、つまり、それは語尾を持たない「対格」なのか、それとも、本当は「主格」なのか、については、活発な議論がなされている。最近の理論的研究においては、それが「主格」(ないしは「無格」)であって「対格」の一種ではないとするのが一般的な考えであり^{*12}、本稿でも、 \emptyset 接辞の目的語は主格であるという立場を取る。(以降、主格形目的語が現れる(4)のような構文を、Milsark 1985 にならい、「NO 構文」と呼ぶ。)そうすると、NO 構文のみが持つ特別な環境下では、目的語が主格形になるという基本的な構図が成立する。

(5)	通常	NO 構文
	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">目的語</div> → acc	→ nom

状況を複雑にしているのが、同じ NO 構文の環境で人称代名詞の方は対格で出現することである。これに対しては、抽象格という概念を取り入れ、統語的には画一的に抽象格として対格が付与されるが、実際の形態は、格の具現化に関わる規則に委ねる、という方向が考えられる。(大文字は抽象格、小文字は形態格を表す。pron=pronoun [+human]「人称代名詞」)

(6)	⇒ ACC → acc	⇒ ACC <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> $\begin{matrix} \nearrow & \text{acc [+pron]} \\ \searrow & \text{nom [-pron]} \end{matrix}$ </div>
-----	-------------	--

(6)の問題点は、抽象格と形態格の対応が不明確だということである。同じように対格の抽象格を付与されているのに、どうして NO 構文においてのみ形態格の具現化に差が出るのか、つまり、通常の場合とどこが異なるのかが不透明である。では、次のように考えてみてはどうだろうか。

(7)	⇒ ACC → acc	⇒ [+pron]ACC → acc ⇒ [-pron]NOM → nom
-----	-------------	--

NO 構文において、目的語が人称代名詞のときは対格、普通名詞のときは主格が付与されると考えれば、すでに統語レベルで別々の格が抽象格として付与されており、

*12 注 2 を参照。

通常の場合と異なり、2つの形態格が現れることは容易に説明できるが、名詞類が持つ特性に応じて別々の抽象格を付与することについては、妥当性に疑問が残る。それに、抽象格を導入する利点がそもそも認められない。

各々の項(名詞)は、その意味的・統語的役割に応じて単一の格のみが与えられるとするのが、従来の一般的な考え方である。しかし、(2)で示したフィンランド語の状況は、意味構造や統語構造の上で同じ位置にある項が複数個の格を担うことを示唆している。一方、形態上、(代)名詞は一つの格形でしか実現できない。そこで、次のような派生の過程を考えてみよう。

$$(8) \quad \Rightarrow \text{ACC} \rightarrow \text{acc} \qquad \Rightarrow \begin{array}{l} \text{ACC} \\ \text{NOM} \end{array} \begin{array}{l} \nearrow \text{nom}[-\text{pron}] \\ \searrow \text{acc}[+\text{pron}] \end{array}$$

(8)では、抽象格の付与は、対象となる名詞の種類に関係なく、ある条件に従って極めて機械的に実行される。しかも、付与される格はひとつに限定されない。しかし、形態化に際しては、ひとつの格が選択されなければならない、それは形態と深く関わる名詞自身の特性に依存する。Nelson(1998)は、このような考えに沿って、フィンランド語の主格形目的語が表面化するのは、複数の抽象格が付与された場合であると仮定し、各名詞類が担う素性集合に基づいて適切な形態を導くために、例えば、次のような一連の音韻化規則を提案した^{*13}。

$$(9) \quad \begin{array}{ll} \text{a.} & \begin{array}{l} \text{N}^0 \\ [-\text{pl}] \\ [-\text{animate pron}] \\ [+ACC] \\ [+NOM] \end{array} \rightarrow /N^0/ \\ \text{b.} & \begin{array}{l} \text{N}^0 \\ [+pl] \\ [-\text{animate pron}] \\ [+ACC] \\ [+NOM] \end{array} \rightarrow /N^0+t/ \\ \text{c.} & \begin{array}{l} \text{N}^0 \\ [+/-pl] \\ [+animate pron] \\ [+ACC] \\ [+NOM] \end{array} \rightarrow /N^0+t/ \\ \text{d.} & \begin{array}{l} \text{N}^0 \\ [+/-pl] \\ [+/-pron] \\ [+NOM] \\ [+PART] \end{array} \rightarrow /N^0+TA/ \end{array}$$

確かに(9)の規則は、適切な格形を派生させる。しかし、なぜ、所与の素性集合が特定の形式になるのか、例えば、ある要素が対格に加え主格を付与された場合、普通名詞では主格/ N^0 /が、代名詞では対格/ N^0+t /が、どうして具現化するのが明らかで

*13 抽象格が多重に付与された場合の音韻化規則のみを引用する。単一の格が付与された場合の規則も別に設けられている(cf. Nelson 1998:160)。なお、(9)d.の分格形/TA/は、母音調和などにもとづく異形態、具体的には、-ta, -tä, -a, -äを有する。

この状況をまとめたのが、次の(13)である*15。

(13) 分格 (>) 対格/[+pron] > 主格 > 対格/[-pron]

階層(13)は、名詞類が多重の格を与えられている場合に威力を発揮する。「対格」が2カ所にわたって現れているのは、人称代名詞では対格が、普通名詞では主格が、(もし付与されていれば)優先されることを保障するためである。通言語的に名詞類の属性によって形態体系が異なることは珍しくないため、このような状況は必ずしも好ましくないとは限らないが、Kiparsky(2001)は、無駄のない格階層を考える上でのヒントを与えてくれる。Kiparsky(2001)は、形態統語的な観点から目的語に付く -n が対格ではなく属格であると結論づけ*16、フィンランド語の構造格を次のように整理した。従来、「対格」として列挙されてきた、-*ä*, -n, -t の3つの形式は、今や、「主格」、「属格」、「対格」として各々位置づけられる。

(14)

	普通名詞 'bear'		人称代名詞 'you'	
	単数	複数	単数	複数
主 格	karhu	karhu-t	sinä	te
対 格	—	—	sinu-t	te-i-dä-t
属 格	karhu-n	karhu-j-en	sinu-n	te-i-dä-n
分 格	karhu-a	karhu-j-a	sinu-a	te-i-tä

結局、目的語には、4つの構造格すべてが現れうることになる。抽象格についてもこの新しいパラダイムを並行的に採用することで、先の階層は、3つではなく、4つの構造格すべての間に存在する順位であると捉えなおすことができる。

(15) 分格 > 対格 > 主格 > 属格

通常の肯定文において、目的語は対格(人称代名詞)または属格(普通名詞)*17で標示されるので、それは対格と属格の抽象格指定を受けていると仮定される。(15)に従って、対格は属格に優先されるが、人称代名詞と異なり、普通名詞は対格形を所有しないため、属格形で表出するほかない。

*15 対格を要求する述語においても、否定文では目的語が分格になることから、分格が対格に優先すると考えてよいだろう。また、階層には含まれていないが、述語が特別に指定する意味格(固有格・語彙格)については、否定文でも分格になることはなく、それが保持されるため、そのような格は分格よりも優先順位が高いと考えられる。

*16 Vainikka(1989, 1993)も、目的語の -n 接辞を属格であると見なしている。また、Vilkuna(1989:7)も参照。

*17 単数形の場合。複数形については後述。

(16) 通常肯定文:[+ACC]&[+GEN]

対格が属格に優先されるので、

人称代名詞:対格

普通名詞 :属格 ←残念ながら対格形を持たないので

不定人称受動文などの NO 構文では、さらに主格の指定が加わる。ここでも、代名詞は対格接辞 -t を伴って現れるが、対格形を備えない普通名詞では、属格でなく、主格が優先して使われる。

(17) NO 構文:[+ACC]&[+GEN]&[+NOM]

対格 > 主格 > 属格 の優先順位なので、

人称代名詞:対格

普通名詞 :主格

否定や非完結相では分格が付与される。分格形はすべての種類の名詞が持つ形式なので、分格形が必ず現れる。

(18) 否定文等:[+PART](&[+NOM](&[+ACC]&[+GEN]))^{*18}

分格が最優先で実現されるので、

人称代名詞:分格

普通名詞 :分格

以上のように、多重格付与の機構に(15)の格階層を適用すれば、どの格形が表層に出てくるかを予測することが可能となる。多重格付与により複数個の格指定を持つに至った素性集合は、格の階層という“フィルター”を通して単一の格指定に絞り込まれた集合体になり、もはや(9)や(10)のような余剰な形態音韻化規則は不要となる。つまり、(15)の格階層こそが Nelson (1998)が見落としていた一般化だと言えよう。

しかし、残念ながら、(15)の階層は完璧ではない。(16)が示すように、普通名詞の場合、通常の肯定文では属格が現れることになるが、複数形の普通名詞は、属格形ではなく主格形 -t で標示される。正しく主格形が現れるようにするためには、例えば、次のような変換規則を設けるなどの特別な手段を講じなければならない。

(19) [+GEN] → [+NOM]/[+pl, +obj]

だが、このような例外的な調整は、統語論における格付与の汎用的機構や格体系の

*18 NO 構文の否定文などでは[+PART]とともに[+NOM]も付与される。また、否定文や非完結相において、[+PART]は[+ACC]&[+GEN]に取って代わるものかもしれないし、それらに加えて与えられるものかもしれない。いずれにせよ、結果は同じである。

整理の有用性を損なわせることになりかねない。

Kiparsky(2001)は、普通名詞の対格接辞 -n を属格形と同定することで、格の融合 (syncretism)、すなわち、ひとつのパラダイムの中で同じ形式がいくつかの異なる機能を担う状態をかなり改善した。格形式の同音異義性を完全に消し去ることがもともと優れた結論であるとは一概に言えないが、格の形態自体をその名称として先の階層を書き替えると、興味深いものが浮かびあがる。

(20) TA 格 > T 格 > Ø 格 > N 格

このような格が存在すると考えれば、格体系は(21)としてふたたび整理され^{*19}、形態と(格)機能との間に“理想的な”一対一の対応関係が成立する。Kiparsky(2001)の表(14)との相違は、複数普通名詞の主格が同じ接辞 -t を持つ人称代名詞の対格と同一視される点にある^{*20}。新しいパラダイムでは、普通名詞の単数は Ø 格のみで T 格という形態を持たず、一方、複数には Ø 格がないことがその特徴となっている。

(21)

	普通名詞 'bear'		人称代名詞 'you'	
	単数	複数	単数	複数
Ø 格	karhu-Ø	—	sinä-Ø	te-Ø
T 格	—	karhu-t	sinu-t	te-i-dä-t
N 格	karhu-n	karhu-j-en	sinu-n	te-i-dä-n
分格	karhu-a	karhu-j-a	sinu-a	te-i-tä

新たな格階層(20)にもとづけば、抽象格から形態格への実現に関して次のようなシナリオが成立し、(15)の階層で取りこぼされていた複数普通名詞も含め、目的語に現れる全ての格を正しく導き出すことが可能となる。

(22) 通常肯定文:[+T]&[+N]

T 格が N 格に優先されるので、

代名詞 : T 格 ←「対格」

単数名詞: N 格 ←「単数属格」 ∵ T 格がないので

複数名詞: T 格 ←正しく、(14)での「複数主格」が現れる

*19 TA 格は、従来の分格と全く同じなので、従来の名前で呼ぶ。N 格も従来の属格に等しいが、目的語にも使われるため、“中立的な”N 格という名称を用いる。また、Ø 格と T 格は、従来の主格や対格との違いを明確にするために、各々、Ø 格および T 格と呼ぶ。

*20 人称代名詞の対格接辞 -t が(普通名詞の)複数接辞 -t から類推などによって史的に成立したと推定する見解が広く見られる。Hakulinen(1961:68)、Marcantonio(1988:fn.11)、Toivainen(1993:120)、Harris & Campbell(1995:320)、Nelson(1998:162)を参照。また、5 章も参照されたい。

(23) NO 構文:[+T]&[+N]&[+0]

T 格 > 0 格 > N 格 の優先順位なので

代名詞 : T 格 ←「対格」

単数名詞: 0 格 ←「単数主格」 ∵ T 格はないが、0 格がある

複数名詞: T 格 ←「複数主格」

(24) 否定文等:[+PART](&[+0](&[+T]&[+N]))

分格(TA 格)が最優先されるので、

代名詞 : 分格

単数名詞: 分格

複数名詞: 分格

以上、名詞が1つ以上の格の指定を受けること、そして、どの格形が出現するかに関する優位の階層がある、という考えにもとづけば、フィンランド語における構造格の分布に対して原理的な説明が可能になることを示した。しかし、同一の名詞にいくつもの格が実際に付与されていくとする仮定は、概念的に妥当であろうか。一般的に名詞類が異なった格形式で現れるのは、統語的・意味的な役割の相違を反映したものだと考え、相反するかもしれない特徴を表す格属性が同時に与えられるとする根拠は何であろうか。また、通常肯定文の場合、目的語は最低でも2つの格(T 格と N 格)の指定を受けなければならないが、その根元的な理由はいったい何なのだろうか。さらに、T 格や N 格とは、そもそもどのような特性を持った格なのであろうか。

このような疑問点に答えるべく、次章では、Kiparsky(2001)や Wunderlich(2000d)で試みられている格の素性分解という考えを取り入れ、フィンランド語の構造格に対する新しい分析を提案する。

3. 格の素性分解

Kiparsky(2001)は、フィンランド語の構造格に関する興味深い分析を提案した。その理論では、格に抽象格と形態格の区別を認める。前者は、(25)のような述語の意味構造(Semantic Form)における地位にもとづき、各々の意味役割(λ -abstractors)に与えられるものであり、 $[\pm H(\text{ighest})R(\text{ole})]$ および $[\pm L(\text{owest})R(\text{ole})]$ という2種類の形式素性を用いて表される。つまり、(構造)格そのものは単一の原初的な(primitive)属性ではなく、より小さく分解された素性、または、その集合から構成されると仮定されている。

(25) 'give': $\lambda z \lambda y \lambda x \lambda s \{ACT(x) \& BECOME POSS(y,z)\}(s)$ *21

- (26) A: Transitive Subject [+HR, -LR]
S: Intransitive Subject [+HR, +LR]
D: Higher (Indirect) Object [-HR, -LR]
O: Lower (Direct) Object [-HR, +LR]

(26)の抽象格は、文法関係に相当するようなものである*22。例えば、他動詞主語に相当する役割 A は、最も上位の要素[+H(ighest)R(ole)]であり、目的語に相当する役割が別にあるために最下位ではない、すなわち、[-L(owest)R(ole)]である。

一方、Kiparsky(1992)のアイデアを下敷きに、Lexical Decomposition Grammar (LDG)を提唱した Wunderlich は、一連の研究*23の中で様々な言語を分析しながら、その言語理論を精力的に発展させている。「格素性」に関する基本的な路線は Kiparsky と同じであるが、具体的な内容について両者の捉え方は異なっている。以下が、LDG が導入している形式素性である。

- (27) [\pm hr] ("there is a/no higher argument")
 [\pm lr] ("there is a/no lower argument")

Kiparsky の素性はその具有者自身の特徴を表しているのに対して、LDG では、他の意味役割との相対的な位置づけを表していると言える。しかし、両者の素性は、+と-を入れ替えることで容易に“翻訳”できる。

- (28) [+HR] \Leftrightarrow [-hr] [-HR] \Leftrightarrow [+hr]
 [+LR] \Leftrightarrow [-lr] [-LR] \Leftrightarrow [+lr]

例えば、最上位の意味役割である ([+HR]) ということは、それよりも上位に別の役割がない ([-hr]) ということであり、最下位の意味役割でない ([-LR]) というのは、それよりも下に役割が存在する ([+lr]) ということに等しい。

格に関わる形式素性は、意味構造内での相対的な位置にもとづいて、自動的に各々の意味役割(項)が獲得する*24。もつとも高い意味役割には[+HR]/[-hr]が、もつ

*21 s は、referential (situation) argument を表し、時制などに関わる。以降の議論では直接関連しないので省略する。また、このような「意味構造」については、Wunderlich(1997,2000a)他を参照。

*22 抽象格と文法関係は同一ではない。文法関係を担わないが、抽象格をもつ要素もある。

*23 例えば、Wunderlich(1997, 2000a, 2000b, 2000c, 2000d, 2000e)、Joppen & Wunderlich (1995)、Wunderlich & Lakämper(2001)。また、Stiebels(2000)も参照。

*24 固有格などの例外的な素性付与の場合はこの限りでない。

とも低い役割には[+LR]/[-lr]が付与され、残りが[-HR]/[+hr]および[-LR]/[+lr]で埋められる。従って、(25)の意味構造では、3つの意味役割に各々次のような素性をもった抽象格が与えられることになる*25。

(29) 'give':	λz	λy	λx	{ACT(x) & BECOME POSS(y,z)}
	<u>-HR</u>	-HR	<u>+HR</u>	
	<u>+LR</u>	-LR	-LR	
	<u>+hr</u>	+hr	<u>-hr</u>	
	<u>-lr</u>	+lr	+lr	

また、形態格も抽象格と同じ素性によって特徴づけられ、それと抽象格との対応関係は、最適性理論(Optimality Theory)*26の枠組みを背景とした制約によって決定される*27。LDG が考える、普遍的な形態格の素性は以下の通りである。

(30) nominative	[]
accusative	[+hr]
dative	[+hr, +lr]
ergative	[+lr]

Kiparsky(2001)では、フィンランド語の形態格に次のような素性が与えられている。

(31) - \emptyset	nominative	[]	(the unmarked case)	
	-(t)a	partitive	[-HR]	(the unmarked complement case)
	-t	accusative	[-HR, -LR]	(the marked complement case)
	-n	genitive	[+HR]	(the specifier case)

LDG は、(27)の形式素性のほうが(26)よりも適切である理由として、例えば、(26)では自動詞の主語が[+HR, +LR]であり、一般的な有標性の考えから解釈すると、最も有標な要素になるのに対して、(27)の考え方では[-hr, -lr]として最も無標の要素として‘適切に’表すことができる点などを挙げている。以下の議論の中では、LDG の素

*25 素性は、{ }で囲まれた意味構造内の項ではなく、 λ -abstractor に与えられる。Kiparsky (2001)は λ -abstractor を theta-role と呼び、LDG は、そのリストを theta-structure と呼ぶ。

*26 最適性理論については、Prince & Smolensky(1993)、McCarthy & Prince(1995)、Kager (1999)を参照。また、この理論の統語論への適用例については、例えば、Legendre, Grimshaw & Vikner(2001)を参照。格を扱った研究も Legendre, Raymond & Smolensky(1993)、Nakamura (1999)、Woolford(2001)などがある。

*27 Kiparsky(1997)では、unification による分析を採用していた。Asudeh(2003)は改良された unification の手法を用いた分析を提案している。

性表記を用いることにする*28。

3.1. 構造格の新たな定義

Wunderlich(2000d)は、Kiparsky(2001)を受け、LDG によるフィンランド語構造格の再分析を試みたものであるが、両者の論はかなりかけ離れている。まず、構造格(形態格)を特定する素性は、それぞれ以下のように定められている。

(32)	Kiparsky(2001)*29	Wunderlich(2000d)
nominative	[]	[]
accusative	[-HR, -LR], [+hr, +lr]	[+hr]
genitive	[+HR], [-hr]	[+hr, +G]
partitive	[-HR], [+hr]	[+hr, +part]

Wunderlich(2000d)は、主格以外の格を、補部に現れる要素として、まず[+hr]で規定した。対格は目的語の中で素性的にもっとも無標であるが、普通名詞にとって無標の格である属格は、素性[+G]でもって対格と差別される。また、起源的には意味格であり、構造格としては後発の分格は二つの素性[+hr]と[+part]で特徴づけられるとした。目的語に使用される属格や分格を対格と弁別する必要性は認められるが、[+G]や[+part]といった、格そのものを暗示するような属性の設定は、意味構造における項の位置関係から格素性が自ずと導かれるとする考えからすれば好ましくない。

他方、Kiparsky(2001)は、項の相対的位置付けを表す2つの形式素性だけで構造格を定義する。フィンランド語では、述語のアスペクト特性が目的語の格形を左右することは広く知られた事実である*30。

(33) a.	Tuon	karhu-n	/	häne-t	/	*karhu-a	/	*hän-tä.
	bring-1SG	bear-N		she-T		bear-P		she-P
	"I'll bring the(a) bear / her."							
b.	Etsin	*karhu-n	/	*häne-t	/	karhu-a	/	hän-tä.
	seek-1SG	bear-N		she-T		bear-P		she-P
	"I'm looking for the(a) bear / her."							

*28 有標性に対する概念的な好ましさは別にして、本稿における議論の範囲内では Kiparsky の素性を採用しても論旨に影響はない。

*29 Kiparsky(2001)からの引用においては、比較を容易にするために LDG 表記に改めたもので記す(または併記する)。

*30 Heinämäki(1984)、Vainikka & Maling(1996)、Kiparsky(1988)などを参照。

例(33)において、aの *tuo*- "bring" は bounded なアスペクトを、bの *etsi*- "seek" は unbounded なアスペクトを表す述語である。前者は、通常、非分格^{*31}の目的語を要求し、後者では、目的語が分格でなければならない。Kiparsky(2001:340)は、各々を R-object および I-object として区別し^{*32}、R-object が complex event を表す述語、具体的には、result role を別に持つ述語に現れると提案する。

- (34) a. Ammuin karhu-n / karhu-a.
 shoot-PAST-1SG bear-N bear-P
 "I shot the(a) bear./ I shot at the(a) bear."
 b. Ammuin karhu-n / *karhu-a kuoliaaksi.
 shoot-PAST-1SG bear-N bear-P dead-TRAN
 "I shot the(a) bear dead."

動詞 *ampu*-(*ammu*-) "shoot" は、アスペクト的に固定しておらず、bounded および unbounded のいずれの状況も表すことができる。しかし、(34)b.のように結果を表す表現を明示的に伴った時は、原則的に分格が不可となる。(34)a.の場合も、非分格の目的語(=R-object)が使われているときは、表層には現れていない result role が潜んでいると考える。Kiparsky(2001:341)は、result role が意味役割の階層の中でもっとも下に位置するとし、下位にそのような役割のある R-object は [+lr] の素性を与えられ、一方、そのような役割のない I-object は標準的に [-lr] と指定されると論じる^{*33}。

- (35) *ampu*- "shoot"
 a. bounded: λz λy λx {SHOOT(x,y) & RESULT(z)}^{*34}
 +hr +hr -hr
 -ir +lr +lr
 / \
 result role R-object
 b. unbounded: λy λx {SHOOT(x,y)}
 +hr -hr
 -ir +lr
 |
 I-object

本稿も R-object と I-object の差異、特に、前者が後者よりも相対的に高い位置を

*31 (目的語に現れる) 0格、N格、T格をまとめて便宜的に「非分格」と呼ぶ。

*32 伝統的な呼称である、resultative object と irresultative object から。

*33 これは、分格形の目的語(=I-object)が最も無標であるとする考えとも一致している。Hakulinen & Karlsson(1979)、Vainikka(1989, 1993, 2003)などを参照。また、注1も参照。

*34 Asudeh(2003:180)を参照。

占めるといふ点については Kiparsky(2001)に同意する。従つて、2つの素性を組み合わせて出来る4つの抽象格は以下のように配分される^{*35}。

(36) 抽象格

- a. 他動詞主語 : [-hr, +lr]
- b. 自動詞主語 : [-hr, -lr]
- c. R-object : [+hr, +lr]^{*36}
- d. I-object : [+hr, -lr]

形態格に関しては Kiparsky(2001)とも Wunderlich(2000d)とも異なる定義を本稿では提案する。前章で、「格階層」がうまく機能するように、構造格の新しい体系を提示した: \emptyset 格、T格、N格、分格。本稿では、これらの格を形式素性を用いて以下のように規定する。

(37) 形態格

- a. \emptyset 格 /- \emptyset / : []
- b. T格 /-t/ : [+hr]
- c. N格 /-n/ : [+lr]
- d. 分格 /-TA/ : [-lr]

本稿が形態格を(37)のように定義する理由を以下に述べよう。

まず、主格に相当する \emptyset 格は、もつとも無標の格として、先行研究と同じく、いずれの素性も持たないとすることに異存はないと思われる。

T格については、対格が主な機能であるので、LDGの標準的な規定(30)に従つて、[+hr]とする^{*37}。Kiparsky(2001)は、対格を[+hr, +lr]と定めた。これは、R-objectと全く同じである。本稿では、T格を[+hr]と定義することで、R-objectを実現するもう一つの格、すなわちN格に、残りの素性[+lr]を結びつける。

そのN格(属格)について、Wunderlich(2000d)は[+hr, +G]としているが、分格の

*35 Kiparsky(2001)のR-objectとI-objectの考え方を受け入れた時点で、抽象格の素性内容は自ずと同じものになる。cf. (26) ただし、(36)の表記はLDGのもの。

*36 この素性の組み合わせは、LDGでは与格に対応する。しかし、フィンランド語には与格と呼ばれる形態が存在しない。Matsumura(1994:fn.10)は、エストニア語の接格(adessive)が与格の機能を備えているのに対して、フィンランド語の接格にはそのようなものがなく、類似の機能はむしろ属格に一部見られると指摘している。また、千葉(1998)は、フィンランド語の使役構文において被使役者を表す接格名詞が道具を表す用法のヴァリエントにすぎないと結論づけている。汎用的な構造格としての与格に相当するような格はこの言語に存在しないようである。

*37 T格は、複数とも関連する。これについては、5章で考察を行う。

[+part]同様、格形そのものを暗示する属性を設けたのでは、格を素性に分解した意義が薄れる^{*38}。一方、Kiparsky(2001)は、属格を指定部(specifier)の格として位置づけ、[-hr](=[+HR])の素性を与えている。本稿では、属格、すなわち、N 格を[+lr]と定義する。この素性を持つ格は、LDG では能格に相当する。能格と属格を同一の形態で表す言語の存在も指摘されるところであり^{*39}、N 格を[+lr]で定義するのは、類型的にも裏付けがある。実際、Kiparsky(1997:477)においても、能格および属格が[+lr](=[-LR])とされていた^{*40}。また、先に言及したように、N 格は R-object を標示する格の一つであり、R-object の抽象格[+hr, +lr]との派生関係からも動機づけられる。

続いて、分格であるが、Kiparsky(2001)では[+hr]、Wunderlich(2000d)では[+hr, +part]と定義されている。しかし、分格は I-object の典型的な格であり、R-object と I-object は、各々[+hr, +lr]および[+hr, -lr]という抽象格を与えられることから、両者の違いは、素性[+/-lr]にあると言える。従って、I-object に特有の分格を他の格と弁別する特性として[-lr]を抽出するのが妥当であると考えられる。

前章の議論の中で、通常肯定文においては、最低でも[+N]と[+T]という2つの抽象格が付与されるという仮定を行った^{*41}。普通名詞および人称代名詞が、ともに正しい格形で生起するためには、どちらか一方だけではなく、両方の抽象格が目的語(=R-object)に与えられていなければならなかった。しかし、分解素性を活用した構造格の新しい捉え方では、2つの格が付与されると考える必要がない。R-object は、意味構造における位置関係から抽象格として[+hr, +lr]の指定を受ける。これは、2つの格を与えられたわけではなく、2つの素性からなる1つの格である。そして、この抽象格は、次節で議論する制約によって T 格[+hr]または N 格[+lr]の形態格に対応づけられることになる^{*42}。もし、個々の素性を形態格と同一視してしまうと、あたかも[+hr]と[+lr]の2つの(抽象)格が与えられているかのように見えるだろう。しかし、[+hr, +lr]はあくまで1つの格であり、従って、複数の異なる抽象格が常に与えられていなければならない

*38 素性[+G]は、Wunderlich(2000c)でも導入されているが、"mnemotechnic reasons"のために用いられており、その正体は明らかでない。

*39 例えば、Blake(1994:151)を参照。

*40 さらに、Kiparsky(2001:363)でも(i)の制約を説明するに際し、下のような記述が見られる：

(i) Max[-LR]/N: A nominal argument assigned a theta-role bearing the abstract structural Case feature specification [-LR] must bear the morphosyntactic case feature specification [-LR].

...(i) says that a nominal subject or higher object should be ergative or genitive (rather than accusative or nominative). (下線部は筆者; [-LR]は[+lr]に等しい)

*41 (22)を参照。

*42 NO 構文では \emptyset 格[]に対応づけられる(普通名詞単数の場合)。

と仮定する必要はもはやない。

以上、フィンランド語の構造格に対して本稿が提唱する抽象格および形態格の定義、そして、その動機について考察した。次節では、これらの新たな格の素性規定をもとに、一連の違反可能な制約を特定の順位で課すことによって、フィンランド語の構造格が適切に予測できることを明らかにする。

3.2. 格形態の実現に関わる制約

Kiparsky(2001)および Wunderlich(2000d)に従い、抽象格がどのようにして形態格と対応付けられるかは、最適性理論の枠組みにおける違反可能な制約によって適切に処理できることを示していく。本稿で提案する制約は、フィンランド語構造格を扱った上記の先行研究で仮定されたものとは異なる。

最適性理論には、Faithfulness 制約および Markedness 制約という、代表的な2種類の制約がある。格の実現ということに当てはめて述べると、前者は、抽象格と形態格の「ずれ」を最小限にするもので、後者は、ある格素性またはその組み合わせを禁止するものである^{*43}。

Kiparsky(2001)は、フィンランド語の構造格を説明するために、次のような制約およびその順位を設けている。

- (38) MAX[-HR] » *[-HR] » JR » MAX[αF] » *[αF]
(MAX[+hr]) (*[+hr])

MAX[feature]の形式をもつのが Faithfulness 制約で、そして、*[feature]の形式のものが Markedness 制約である^{*44}。

- (39) a. MAX[αF]: An argument assigned a theta-role bearing the abstract Case feature specification [αF] must bear the morphosyntactic case feature specification [αF].
b. *[αF]: everything gets nominative case.

特殊なのは、中央に設けられた JR という制約である。JR、すなわち Jahnsson's Rule (3)は、目的語における \emptyset 格(無接辞;第2対格)と N 格(対格)の分布を記述した

*43 Kiparsky(2001:329)を参照。

*44 Kiparsky(2001:362)を参照。一般的には、次のように定義される。(cf. Wunderlich 2000c 他)

- (i) Max(αF): Every feature [αF] in the input has a correspondent in the output, with $\alpha=\{+,-\}$.
(ii) *[αF]: Avoid [αF] in the output, with $\alpha=\{+,-\}$.

ものであった。Kiparsky(2001)は、それを制約として以下のように定義する。

(40) Jahnsson's Rule (JR):

NP- \emptyset must be a pivot.

(41) DEF: X is a pivot iff

a. X is [+SC], and

b. no realizable thematically higher argument is [+SC]^{*45}

Jahnsson's Rule が、目的語において主格形と属格形の交替を引き起こす要因ではあるが、(40)が極めてフィンランド語に特有の制約である^{*46}ことに加え、これが主格ではなく、- \emptyset 形を対象にしている点が特異である。Kiparsky(2001)の考える(14)のパラダイムによれば、単数名詞の - \emptyset も複数名詞の -t も共に主格接尾辞である。しかし、JR が働くのは単数名詞だけで、複数名詞は有形の接辞を持つために、JR の制約に抵触することがない^{*47}。どうして主格のうち、形態的に - \emptyset 形の単数名詞のみがこのような制約の対象になるのか、その動機が明らかではない^{*48}。

フィンランド語の目的語に観察される格交替には、JR が何らかの形で働いているのは確かであるが、Kiparsky(2001)は、- \emptyset と -t を同一の格としているため、格自体ではなく、一部の形態のみを規制するような規則を生み出さざるをえなくなっている^{*49}。

Wunderlich(2000d)が提案する抽象格(theta-structure)から形態格(morphosyntactic surface form)への対応を制御する制約には、特定の格形式を直接、禁止するものが多い。次がその制約および順位である。

(42) MAX(+part) » *acc/N, *gen/pl, *part/b, *1gen » MAX(+hr) » *gen

(43) a. *acc/N: Accusative is not allowed with nouns.

*45 cf. Kiparsky(2001:326): "... theta-roles bear a feature [\pm SC] which distinguishes those which are eligible for morphological licensing by structural cases from those which can only be licensed by oblique (semantic) cases, prepositions or positional case."

*46 Asudeh(2003:188)は次のように述べている: "Jahnsson's Rule is a descriptive generalization about Finnish and is not universal."

*47 Asudeh (2003:180)も JR を以下のように定義している:

(i) If the subject is an external nominative subject, then the object must have a phonologically realized (i.e. non-zero) case ending.

*48 Reime(1993)のように、PF(Phonetic Form)における Visibility Condition のようなものに属するのかもしれない。Kiparsky(2001:324)を参照。

*49 Asudeh(2003)の JR でも事情は同じである。注 47 を参照。また、音形の有無を条件にした規則には、反例がある。5章を参照。

- b. *gen/pl: Genitive is not allowed with plural arguments.
- c. *SingleGen: Genitive is not allowed as the only argument of a predicate.
(abbreviated *1gen)
- d. *part/b: Partitive is not allowed with bounded predicates.

(43)a.,b.,d.は、**feature/context* の形式をとった条件指定のある Markedness 制約である。(43)a.は、名詞が形態的に対格を有しないことを述べたもので、この制約がなんらかの形で必要であることは否定しない。しかし、(43)b.は、目的語という環境に限定される制約であり、複数名詞に属格形がないことを意味するわけではない。所有などを表す場合は、問題なく複数属格形が現れるからだ。また、この種の制約は、類似の制約が他にも存在することを暗示させる。例えば、フィンランド語では順位が低いために、実質上、格の候補選定に関与しないのだが、**part/pl* や**gen/sg* などといった制約が(42)の最後尾にある**gen* 以降に数多く並べられているのかもしれない。だが、このような制約が普遍的な制約として相応しいかどうかには疑問が残る。

JR の機能を果たすのが、(43)c.**SingleGen*(**1gen*)である。この制約も格形式自体を対象としており、分解素性を用いた分析の利点が生かされていない。さらに、次の例では、文末の「数量副詞(*measure adverbial*)」が述語の項ではないにもかかわらず、目的語と同様の格交替を示す*⁵⁰。「述語の項」に言及した制約(43)c.では、(44)の現象を説明するのは困難である。

- (44) a. Opiskelin vuode-n.
 study-PAST-1SG year-N
 "I studied for a year."
- b. Opiskeltiin vuosi.
 study-PASS.PAST year- \emptyset
 "People/we studied for a year"
- c. En opiskellut vuot-ta-kaan.
 NEG-1SG study-PTC year-P-even
 "I didn't study even for a year."

前節で論じたように、本稿では、(形態)格に担わせる素性が Kiparsky(2001)および Wunderlich(2000d)と異なるために、抽象格と形態格を対応させるための制約も新たなものが必要となる。本稿では、(45)の制約を提案し、これらの制約およびその順位がフィンランド語の構造格の分布を説明できることを論証する。

*50 このような副詞は、*objektinsijainen määrän adverbiali* (OSMA) "object-cased adverbial of amount"と呼ばれる。Hakulinen & Karlsson(1979:216)、Maling(1993:53ff)、Kiparsky(2001:323)、Vainikka(2003:259ff)を参照。

(45) MORPHREAL » MAX(-lr)/[+hr] » MAX(+hr), *[alr]/[-hr] » MAX(+lr), *[+hr]

優先順位のもっとも高い MORPHREAL 以外は、“標準的な”形式の Faithfulness 制約ないしは Markedness 制約であり、その内容も理解できるものと思われるが、その中のいくつかについて説明を加えておこう。

(46) MORPHREAL (Morphological Realizability)

所与の形態格は、対象要素にとって実現可能な形式である。

(46)は、Wunderlich(2000d)の*acc/N を一般化した類の制約であり、そして、これは、Asudeh(2003:180)が提案した次の制約と軌を一にする。

(47) Realizability: A morphosyntactic case is only available to the syntax if it can be realized morphologically by a case ending and every argument must bear morphosyntactic case.

具体的に言えば、(46)の制約は、(48)a.のように単数名詞には T 格が存在せず、(48)b.のように複数名詞では \emptyset 格が不可能であることを述べたものである^{*51}。

- (48) a. *karhu-t [sg] ("a bear"の意味で)
bear-T
b. *karhu-i- \emptyset [pl] ("bears"の意味で)
bear-PL- \emptyset
cf. karhu-i-lla "on (the) bears"
bear-PL-ADE

その次にランク付けされているのが、条件指定を持つ Faithfulness 制約である^{*52}。

(49) MAX(-lr)/[+hr]

抽象格[+hr, -lr]は、形態格において[-lr]を保持する。

*51 複数形で- \emptyset が不可能なのが、-i で終わる(二重)母音が語末に立たないというような音韻的要因によるものでないことは、動詞の過去形の構成と比較すると明らかである。

(i) puhu-i- \emptyset
speak-PAST-3SG

動詞の過去形では、同じ語末音が問題なく現れる。(48)b.が許容されないのは、形態的な制約による。

*52 類似の形式をとった制約は Wunderlich(2000e)にある。

(i) Max(+hr)/[+lr]: Every feature combination [+hr, +lr] in the input has a correspondent [+hr] in the output.

分格[-lr]は最優先で実現される格であり、上の制約によってこれが保障される。

次の制約(50)は、属格[+lr]と分格[-lr]が基本的に主語(典型的には[-hr]を持つ)には現れないことを捉えたものである。また、後述するように、同制約が Jahnsson's Rule を生み出す誘因ともなる。

(50) *[α lr]/[-hr]

抽象格で[-hr]を有するものは、形態格で[\pm lr]の素性を持たない。

では、本稿が提唱する制約(45)が、次の(51)で観察される、それぞれの格形をどのように最適候補として選出するかを考察していこう^{*53}。

(51) a. Mies / Mieke-t / Hän tuo (tuovat) karhu-n / karhu-t / häne-t.
man- \emptyset man-T he- \emptyset bring.3SG (-3PL) bear-N bear-T she-T
"The man / The men / He will bring the(a) bear / the bears / her."

b. Mies / Mieke-t / Hän etsii (etsivät) karhu-a / karhu-j-a / hän-tä.
man- \emptyset man-T he- \emptyset seek.3SG (-3PL) bear-P bear-PL-P she-P
"The man / The men / He is(are) looking for the(a) bear /(the) bears / her."

動詞 *tuo-* "bring" は、bounded なアスペクトを持ち、R-object を取る。一方、動詞 *etsi-* "seek" は unbounded な述語であり、その目的語は I-object である。各々の意味構造は、概略、以下のようになる (λx が主語、 λy が目的語に対応する)。

(52) a. *tuo-*: λy λx {BRING(x,y) (&RESULT(z))}
+hr -hr
+lr +lr
b. *etsi-*: λy λx {SEEK(x,y)}
+hr -hr
-lr +lr

Kiparsky(2001)に従い、(52)a.では、result role(z)が潜在すると考えられるので、 λy は [+lr]の指定を受け、他の素性は、 λx および λy の相対的な位置に基づいて、自動的に与えられる。意味役割 λx は最上位にあるので[-hr]を持つことになり、下位には λy があるので[+lr]となる。 λy は、[+lr]に加え、上位に λx が存在するため、[+hr]と指定される。(52)b.では、すべての素性が λx と λy の位置関係から導かれる: λx は最上位の役割であり、別の役割 λy があることから、[-hr, +lr]となり、I-object の λy は、最下位の役割として、[+hr, -lr]の抽象格が与えられる。

まず、目的語の R-object と I-object の格形については、各々、(53)および(54)のように評価される。いずれも、正しい格形が最適候補となっている。

*53 本稿末の Appendix 2 も参照。

(53)R-object:

	MORPHREAL	MAX(-lr)/+hr	MAX(+hr)	*αlr/-hr	MAX(+hr)	*+hr
a. [+hr, +lr, -pl, -pron] <i>karhu-n</i>						
-∅ []			*		*!	
-T[+hr]	*!				*	*
☞ -N[+lr]			*			
-TA[-lr]			*		*!	
b. [+hr, +lr, +pl, -pron] <i>karhu-t</i>						
-∅ []	*!		*		*	
☞ -T[+hr]					*	*
-N[+lr]			*!			
-TA[-lr]			*!		*	
c. [+hr, +lr, +pron] <i>häne-t</i>						
-∅ []			*!		*	
☞ -T[+hr]					*	*
-N[+lr]			*!			
-TA[-lr]			*!		*	

(54) I-object

	MORPHREAL	MAX(-lr)/+hr	MAX(+hr)	*αlr/-hr	MAX(+hr)	*+hr
a. [+hr, -lr, -pl, -pron] <i>karhu-a</i>						
-∅ []		*!	*			
-T[+hr]	*!	*				*
-N[+lr]		*!	*			
☞ -TA[-lr]			*			
b. [+hr, -lr, +pl, -pron] <i>karhu-j-a</i>						
-∅ []	*!	*	*			
-T[+hr]		*!				*
-N[+lr]		*!	*			
☞ -TA[-lr]			*			
c. [+hr, -lr, +pron] <i>hän-tä</i>						
-∅ []		*!	*			
-T[+hr]		*!				*
-N[+lr]		*!	*			
☞ -TA[-lr]			*			

さらに、(55)および(56)の表が示すように、目的語だけでなく、主語の格も、(他動詞と自動詞の別なく)同じ制約により、名詞類の特性に応じて適切な格が選ばれている。

(55) 他動詞主語

	MORPHREAL	MAX(-lr)/+hr	MAX(+hr)	*αlr/-hr	MAX(+lr)	*+hr
a. [-hr, +lr, -pl, -pron] <i>karhu-θ</i>						
☞ -θ []					*	
-T[+hr]	*!				*	*
-N[+lr]				*!		
-TA[-lr]				*!	*	
b. [-hr, +lr, +pl, -pron] <i>karhu-t</i>						
-θ []	*!				*	
☞ -T[+hr]					*	*
-N[+lr]				*!		
-TA[-lr]				*!	*	
c. [-hr, +lr, +pron] <i>hän-θ</i>						
☞ -θ []					*	
-T[+hr]					*	*!
-N[+lr]				*!		
-TA[-lr]				*!	*	

(56) 自動詞主語

	MORPHREAL	MAX(-lr)/+hr	MAX(+hr)	*αlr/-hr	MAX(+lr)	*+hr
a. [-hr, -lr, -pl, -pron] <i>karhu-θ</i>						
☞ -θ []						
-T[+hr]	*!					*
-N[+lr]				*!		
-TA[-lr]				*!		
b. [-hr, -lr, +pl, -pron] <i>karhu-t</i>						
-θ []	*!					
☞ -T[+hr]						*
-N[+lr]				*!		
-TA[-lr]				*!		

	MORPHREAL	MAX(-lr)/+hr	MAX(+hr)	*αlr/-hr	MAX(+lr)	*+hr
c. [-hr, -lr, +pron] hân-θ						
☞ -∅ []						
-T[+hr]						#!
-N[+lr]				#!		
-TA[-lr]				#!		

各々の制約がどの格形式の実現に最も関与しているかを注視してみると、その内容と順位が 2.2 節で提示した格の階層(20)と並行する部分が見つかる。

- (57) MAX(-lr)/[+hr] » MAX(+hr) , *[αlr]/[-hr] » MAX(+hr)
- ⇕ ⇕ ⇕ ⇕
- 分格 > T 格 > *N 格 > N 格
- (TA 格)
- ⇕
- ∅ 格

格の階層は、分解素性をもとにした制約を形態格の観点から書き記したものだと言えるかもしれない。では、わざわざ、格を素性に分解せずとも、(20)の階層だけで十分だったのではないだろうか。しかし、(20)およびその背景にある多重格付与の理論では正しく形態格を導き出せない場合があるのである。格階層は目的語の格形を考慮して導かれたためか、実は、主語の格形をうまく予測できない。主語は一般に ∅ 格で標示されるので、抽象格として [+∅] の指定を受けると考えられる。すると、格の階層にもとづけば、格実現は次のようになる。

- (58) 主語: [+∅]
- 人称代名詞: ∅ 格
- 単数名詞 : ∅ 格
- 複数名詞 : 実現不可能

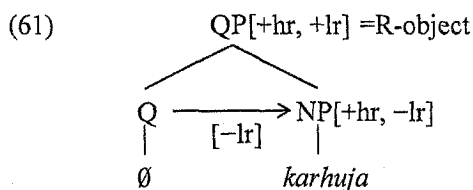
表(21)で示したように、複数名詞は ∅ 格を持たないため、(20)の格階層と(58)のシナリオでは、格形態を獲得することができない。そこで、複数名詞の主語が接辞 -t で標示されることから、主語には [+∅] に加え [+T] の抽象格も付与されると仮定してみよう。

- (59) 主語: [+∅]&[+T]
- T 格は、∅ 格に優先するので、
- 人称代名詞: T 格 ← 誤った格形
- 単数名詞 : ∅ 格
- 複数名詞 : T 格

今回は、複数名詞が正しく T 格を伴って現れるが、一方で、人称代名詞が誤って T 格で標示されてしまう。(58)および(59)のいずれの前提においても、(20)をもってしては全ての種類の名詞について正しい格形を予想することができない。ところが、(45)の制約は目的語だけでなく、(55)と(56)によって示されるとおり、主語の格についても適切な格を選び出すことが可能である。つまり、(45)の制約は、(20)の格階層に比べ、一般性において断然優れていることが理解できる。

ここで R-object に現れる分格について言及しておこう。通常、非分格で現れる R-object は 1)否定のスコープ内にあるか、2)不定数量を表す場合に、分格で標示される。前者については、Kiparsky(2001:344)も想定しているように、否定要素が[-lr]を付与すると考えられる^{*54}。フィンランド語の典型的な否定要素は、人称変化する動詞的範疇であり、主要部として独立した句を形成すると仮定されるので^{*55}、一般動詞がそのアスペクト特性に応じて R-object[+lr]または I-object[-lr]を選ぶのと同じように格付与能力を具有すると考えてよいだろう。その結果、否定文の目的語は I-object と同じ素性集合[+hr, -lr]を持つことになり、表(54)のように、全てのタイプの名詞が分格形で標示されることが正しく導かれる。2つ目の用法については、この分格が名詞句内部で付与されていると考え、例えば、数量詞 *paljon* 「多くの」が分格の名詞を従わせるように、単独で不定数量を表す分格は、音声的に空の数量詞に支配されていると想定できる。これは、Kiparsky(2001:343)が仮定していることでもあるが、特に目新しい考え方ではない^{*56}。下の例文(60)では、result role を担う要素と共起しているため、目的語 *karhuja* は R-object でなければならない。それに反して、分格の I-object が現れているように見えるのは、“外側”の QP が R-object で、分格形の名詞は空の数量詞の補部として QP 内で[-lr]の指定を受けているからである。

- (60) Ammuin karhu-j-a kuoliaaksi.
 shoot-PAST-1SG bear-PL-P dead-TRAN
 "I shot bears dead."



*54 Wunderlich(2000d:3)も、否定動詞が素性[+part]を与えるとしている。

*55 フィンランド語の節構造については、Holmberg, Nikanne, Oraviita, Reime & Trosterud (1993)や Nelson(1998)を参照。

*56 Kayne(1984)、Hoop(1989)、Vainikka(2003:fn.4)を参照。

構造(61)によって、見かけは分格[-lr]であるが、目的語全体 QP としては R-object [+hr, +lr]であることに矛盾のない説明が与えられる。

最後に、最も探究心を誘う現象、すなわち、 \emptyset 格目的語について、それが一連の制約をくぐり抜け、どのようにして選ばれるかを考察したい。Wunderlich(2000d)は、NO 構文では最上位の意味役割が「降格する(demote)」と想定している。そして、それは、意味構造の中で existential binding によって表現される^{*57}。しかしながら、そのことによって残りの意味役割の格素性が変わることはない。Kiparsky(2001:353, 360)も、「主語」が降格して[-SC]になる、すなわち構造格で認可されなくなることを以外は、「目的語」の抽象格等の素性は通常の文と同じであると考えている。

- (62) *tuo*[+IMP]/*tuodaan*[+PASS]: $\lambda y \exists x \{ \text{BRING}(x,y) \}$
+hr
+lr

降格された意味役割 $\exists x$ は、統語上は表に出てこないが、 λy にとっては、上位の意味役割として存続しており、 λy の抽象格素性が不変であることは認めなければならない。しかし、 λy がそれとは別に、やはり何らかの変化を被っていることを窺わせる現象がある。次の例を見られたい。

- (63) a. *Liisa muisti matka-n vuode-n.*
Liisa remember-PAST.3SG trip-N year-N
"Liisa remembered the trip for a year."
b. *Muista matka vuode-n!*
remember.IMP trip- \emptyset year-N
"Remember the trip for a year!"

例文(63)には、目的語 *matka*- "trip"に加え、格に関しては目的語と同じように振る舞う数量副詞 *vuode*- "year"が含まれている。この種の副詞がどのようにして格素性を獲得するのかが明らかでないが、目的語、正確には R-object と同じ抽象格の素性[+hr, +lr]を備えていると考えることによって、例(44)で見たように R-object と全く同じ格交替をすることに説明がつく。ところが、NO 構文の(63)b.において、 \emptyset 格に変わっているのは R-object の *matka* だけで、副詞の *vuode-n* は N 格のままである。同じように [+hr, +lr]を持ち、各々単独では格の交替を見せるにもかかわらず、2つが同時に生じた場合、R-object のみに格の交替が起こるのはどうしてだろうか。両者にはいかなる違いがあるのだろうか。

*57 類似的な考えとして、Pylkkänen(1998)は、NO 構文における主語(外項)が文脈によってその値が決まる free variable であると仮定している。

NO 構文の意味構造において降格した最上位の意味役割 x は、消滅したわけではないが、統語上は存在しない^{*58}。つまり、統語上は R-object(= λy)が最上位の要素になる。数量副詞も、他に目的語がなく、単独で生起しているときは、NO 構文においてそれが最上位の統語的要素になるのは、R-object と変わらない。しかし、数量副詞が R-object とともに現れるときは、R-object の方が上位に存在するため、たとえ NO 構文になっても数量副詞が最上位の要素になることはない。この相違が、(63)に見られる、格交替の有無の引き金になっていると考えられる。ゆえに、適切な形態格の選出に際しては、統語構造に関わる情報も不可欠であると言える。

Kiparsky(1997)は、抽象格と形態格以外に、同じ素性による positional licensing/case の必要性を訴えている。これは、構造上の位置と結びついた格素性であり、Kiparsky(2001)は、例えば、フィンランド語や英語で IP(INFL Phrase)の指定部に[-hr] (= [+HR])を与えている。この positional case を固定的なものではなく、統語構造(の変化)に応じた相対的・流動的な素性として解釈しなおし、それを「統語格」と呼ぶことにしよう。先の(62)において、統語的には隠れてしまった最上位の役割 $\exists x$ は、意味構造の中では λy の上位に存在するため、 λy は [+hr] の素性を保持する。しかし、 $\exists x$ は統語的に構造格の対象としては存在しないものとして扱われる。その結果、 λy が統語的に最上位の要素となり、統語格として [-hr] を付与されると考え^{*59}、NO 構文における意味役割/項は、最終的に以下のような素性指定を受けると想定しよう^{*60}。

(64) <i>tuo</i> [+IMP]/ <i>tuodaan</i> [+PASS]:	λy	$\exists x$	{BRING(x, y)}	
	+hr			}
	+lr			
	-hr			}
	+lr			

制約を遵守しているか、違反しているかを判断する際に、抽象格と統語格の素性

*58 Timberlake(1975)、Nelson(1998)、Kiparsky(2001)など、従来の研究の多くが、意味的ではなく、統語的に(主格)主語が不在または inactive であることが、主格形目的語の生起に関与すると仮定している。

*59 必ずしも主語になったわけではないことに注意されたい。Taraldsen(1986)、Maling(1993)、Vainikka(1989, 1993)、Nelson(1998)などにおいては、通常ならば主語(外項)に与えられるところの属性/格が、NO 構文においては統語的な(主格)主語がないために、目的語がそれを獲得するというような主旨の分析が行われている。目的語がその属性を得るために主語の位置まで“出向く”のではなく、属性/格が目的語の方に“やって来る”というイメージである。

*60 (64)は、統語構造に基づく形式素性(統語格)が加わっているので、もはや純粋な「意味構造」とは言えないかもしれないが、便宜上、意味構造と同じ形式で格素性の配置を示す。

を区別しなければならない理由はなく、まったく同じように扱われると考えてよいだろう。以上の仮定を踏まえて、一連の制約が NO 構文に現れる格について下した評価が次の表である*61。

(65) 目的語/NO 構文

R-object	MORPHREAL	MAX(-lr)/+hr	MAX(+hr)	*αlr/-hr	MAX(+lr)	*+hr
a. [+hr, +lr, -hr, -pl, -pron] <i>karhu-θ</i>						
☞ -θ []			*		*	
-T[+hr]	*!				*	*
-N[+lr]			*	*!		
-TA[-lr]			*	*!	*	
b. [+hr, +lr, -hr, +pl, -pron] <i>karhu-t</i>						
-θ []	*!		*		*	
☞ -T[+hr]					*	*
-N[+lr]			*!	*		
-TA[-lr]			*!	*	*	
c. [+hr, +lr, -hr, +pron] <i>hāne-t</i>						
-θ []			*!		*	
☞ -T[+hr]					*	*
-N[+lr]			*!	*		
-TA[-lr]			*!	*	*	
d. (I-object)[+hr, -lr, -hr] <i>karhu-a, karhu-j-a, hān-tä</i>						
-θ []	[*!]	*!	*			
-T[+hr]	(*!)	*!				*
-N[+lr]		*!	*	*		
☞ -TA[-lr]			*	*		

※ [*!]は普通名詞複数形の時、(*!)は普通名詞単数形の時

表(53)a.では、普通単数名詞にとって最適な候補として N 格が選ばれていたが、(65)a.では、統語格[-hr]の追加により、N 格では制約*[αlr]/[-hr]に違反が生じるため、θ格が最適候補となる。つまり、当該の制約が Jahnsson's Rule の主因になると言えよう。また、この制約は主語に N 格や分格が生起しないことを主眼とするが、同じように違反していても、(55)/(56)c.では θ格となる人称代名詞が、(65)c.では適切

*61 便宜的に統語格の値を斜体字で記すが、それ自体に意味はない。また、統語格と同じ値が抽象格としてすでに付与されている場合、以下の素性集合の表示では統語格の値を省略する。

に T 格で現れると予測される点にも留意されたい。これは、本稿が提唱する一連の仮定が有機的に作用していることを示している。

数量副詞についても、単独で存在する時には、R-object と同じ抽象格および統語格の素性を与えられると考えれば、その格交替が全く同じであることに納得がいく。

(44) a. (Minä) opiskelin	vuode-n.	b. Opiskeltiin	vuosi.
I- \emptyset	year-N		year- \emptyset
-hr	+hr		+hr
+lr	+lr		+lr
-hr	+hr		-hr

一方、数量副詞が R-object とともに現れるときは、以下のように素性が配置される。

(63) a. Liisa muisti	matka-n	vuode-n.	b. Muista	matka	vuode-n!
Liisa- \emptyset	trip-N	year-N	trip- \emptyset		year-N
-hr	+hr	+hr	+hr	+hr	
+lr	+lr	+lr	+lr	+lr	
-hr	+hr	+hr	-hr	+hr	

通常の文(63)a.では、目的語も副詞も全く同じ抽象格を持ち、対応する形態格にも違いがない。ところが、b.の NO 構文では、最上位の役割が降格したために、第2位の R-object が統語的な最上位要素になり、[-hr]が与えられ、単数普通名詞では \emptyset 格で表示されることになる。数量副詞のほうは、R-object の存在により依然として[+hr]のままであり、通常の場合と素性が変わらず、格交替も観察されない^{*62}。

*62 数量副詞が R-object 以外の目的語と共起する時は、その振る舞いが異なる。Nelson(1998: 177, 184)、Maling(1993)、Vainikka(2003)を参照。

(i) Liisa muisteli matka-a vuode-n.
Liisa reminisce-PAST.3SG trip-P year-N
"Liisa reminisced about the trip for a year."

(ii) Muistele matka-a vuosi!
reminisce-IMP trip-P year- \emptyset
"Reminisce about the trip for a year!"

(63)と異なり、R-object ではなく、I-object (や意味格で標示された目的語)と共起する場合は、上の例のように数量副詞が格の交替を示す。本稿の分析によれば、NO 構文において数量副詞が \emptyset 格で標示されるということは、統語的に最上位の要素になり、統語格[-hr]を得ると考えなければならない。確かに、抽象格の素性においては、I-object が[+hr, -lr]で、数量副詞が[+hr, +lr]であり、素性的には後者が前者よりも上位にあるように思われるが、語順や述語との意味関係から単純にそのように考えるわけにはいかない。意味構造における数量副詞の位置づけや副詞に対する格素性の付与に関するメカニズムを明らかにしていく必要がある。

4. 非定形節と構造格

前章では、本稿の提案する一連の制約が各々の環境における適切な格形式を最適候補として選出することを見た。本章では、少し複雑な構造格の分布を持つ埋め込み節についても、複文における格素性の配分に関する若干の仮定を採用することで、同一の制約が有効に機能することを論じる。

4.1. 3種の非定形従属節

本稿では、Kiparsky(2001) および Wunderlich(2000d)で取り上げられている、以下の3タイプの非定形節について分析をおこなう。

- (66) a. Pakotin sinu-t / Mati-n näkemään karhu-n.
force-PAST-1SG you-T Matti-N see-INF-ILL bear-N
"I forced you / Matti to see the(a) bear."
b. Sinu-t / Matti pakotettiin näkemään karhu.
you-T Matti-Ø force-PASS.PAST see-INF-ILL bear-Ø
"You / Matti were/was forced to see the(a) bear."
c. En pakottanut sinu-a / Matti-a näkemään karhu-a.
NEG-1SG force-PTC you-P Matti-P see-INF-ILL bear-P
"I didn't get you / Matti to see the(a) bear."
- (67) a. Annoin sinu-n / Mati-n nähdä karhu-n.
let-PAST-1SG you-N Matti-N see-INF bear-N
"I let you / Matti see the(a) bear."
b. Sinu-n / Mati-n annettiin nähdä karhu.
you-N Matti-N let-PASS.PAST see-INF bear-Ø
"You / Matti were/was allowed to see the(a) bear."
c. En antanut sinu-n / Mati-n nähdä karhu-a.
NEG-1SG let-PTC you-N Matti-N see-INF bear-P
"I didn't let you / Matti see the(a) bear."
- (68) a. Halusin sinu-n / Mati-n näkevän karhun.
want-PAST-1SG you-N Matti-N see-PTC-N bear-N
"I wanted you / Matti to see the(a) bear."
b. Sinu-n / Mati-n haluttiin näkevän karhun.
you-N Matti-N want-PASS.PAST see-PTC-N bear-N
"It was wanted for you / Matti to see the(a) bear."
c. En halunnut sinu-n / Mati-n näkevän karhu-n.
NEG-1SG want-PTC you-N Matti-N see-PTC-N bear-N
"I didn't want you / Matti to see the(a) bear."

(66)~(68)に例示した非定形節を従属節に持つ文においては、次にまとめたような構造格の出現が観察される*63。

(69) NP_x V NP_y Non-Finite NP_v

主節→	通常		NO 構文		否定文	
	NP _y	NP _v	NP _y	NP _v	NP _y	NP _v
a. <i>pakottaa</i> タイプ(66)	N/T	N/T	∅/T	∅/T	P	P
b. <i>antaa</i> タイプ(67)	N	N/T	N	∅/T	N	P
c. <i>haluta</i> タイプ(68)	N	N/T	N	N/T	N	N/T

(69)a.の *pakottaa* タイプにおいては、NP_y が R-object と同じ格交替を示し、そして、興味深いことに、非定形動詞の目的語 NP_v もそれに連動している。(69)b.の *antaa* タイプでは、NP_y が(人称代名詞も含めて)原則的に N 格で標示されるのに対して、埋め込まれた節の目的語 NP_v があたかも主節の目的語であるがごとく、その文タイプに応じて格形を替える。(69)c.の *haluta* タイプでは、主節が NO 構文や否定文に変わっても、基本的に名詞の格形に影響が及ぶことがない。

4.2. Kiparsky(2001)の分析*64

Kiparsky(2001)は、(66)~(68)の構造(特に *antaa* タイプの NP_y)については詳細な検討を加えているが、その格の出現に関しては、個々の事例に対して制約がどのように結果を出すかを具体的に示していない。そのため、正しい格形が本当に予想

*63 どのタイプでも、従属節の主動詞は全て非定形であるが、その個々の形式は異なっている。(66)の *pakottaa* タイプは、伝統文法で「第3不定詞入格形」と呼ばれる形式が用いられている。(67)の *antaa* タイプでは(辞書における動詞の見出し形にも採用されている)「第1不定詞」が用いられている。(68)の *haluta* タイプでは、「分詞+N 格形」が使われ、意味に応じて「現在分詞」「過去分詞」(それぞれ「能動」と「受動」がある)が現れる。しかし、この分詞に現れる N 格形は特殊で、NO 構文で ∅格になることもなく、また、否定文でも分格にならない。また、(69)は NP_v が R-object の場合であり、I-object の場合は常に分格が現れる。さらに、例(85)も参照。

*64 Kiparsky(2001)では、次のような非定形従属節も挙げられている:

(i) Nukuin sinu-n / Mati-n nähdessä karhu-n.
 sleep-PAST-1SG you-N Matti-N see-INF-INE bear-N
 "I slept while you /Matti saw a(the) bear."

本文中で扱ったものと異なり、(i)の従属節は、主節の目的語ではなく、時を表す副詞的要素である(上の例では、「第2不定詞内格形」が用いられている)。しかし、格の分布は、*haluta* タイプに類しており、同じように分析できると思われる。

できるかどうか怪しいところがある。Kiparsky(2001)は、おそらく、問題の文に対して概略、以下のような特徴を想定すると思われる^{*65}。

- (70) a. *pakotetaan*[+PASS]: NP_y Non-Finite NP_v
 [+SC] [+SC]
 pivot pivot
- b. *annetaan*[+PASS]: NP_y Non-Finite NP_v
 [-SC] [+SC]
 *pivot pivot
- c. *halutaan*[+PASS]: NP_y Non-Finite NP_v
 [+SC] [+SC]
 pivot *pivot

Jahnsson's Rule(40)によると、目的語が \emptyset 接辞 (\emptyset 格) で現れるためには、pivot でなければならない。pivot の定義(41)から、[-SC]である(70)b.の NP_y は pivot になれず、NP_v が pivot となり、結果として、後者に \emptyset 接辞が正しく許容される。

(70)c.の NP_v は[+SC]を持つが、上位にも[+SC]の指定を受けた NP_y があるため、pivot になることができない。従って、もし、NP_v が \emptyset 接辞で現れると JR に違反することになり、NP_v に格交替が見られないことが説明される。

問題は、(70)a.である。これに相当する例(66)b.では、NP_y にも NP_v にも同時に NP- \emptyset が現れている。つまり、両方とも pivot であるはずである。さもなくば、JR に違反してしまうからだ。しかし、NP_v が pivot になるためには、pivot の定義(41)から、それよりも上位にある NP_y は pivot であってはならない。ところが、NP_y にも \emptyset 格が現れるのが現実であり、やはり、pivot でなければならない。このジレンマから抜け出すためには、NP_y が[+SC]を有するにも関わらず、NP_v はそれを無視していると考えなければならないが、一つの文に複数の pivot が存在すること自体が、「主格目的語は、定形文全体の中で pivot でなければならない」^{*66} ことと整合性があるかどうか定かでない。さらに、例(66)b.の事実は、Kiparsky(2001:338)が「主節に pivot がある場合、非定形従属節の単数普通名詞の目的語は属格である」と述べていることと、そもそも矛盾するように思われる。もし、(70)a.のような解釈が正しくなく、NP_y のみが pivot であると考えれば、矛盾の一部はなくなるが、その場合、NP_v が \emptyset 格で標示されることが未解決のまま残ってしまう。Kiparsky(2001)は、節と節の間に連鎖的な格(素性)の「継承・浸透」のようなものが働く想定しているように思われる^{*67}が、その詳細な内

*65 Kiparsky(2001:358, 360f)を参照。

*66 Kiparsky(2001:338)を参照。

*67 "This genitive object marking extends obligatorily down through a chain of such infinitive complements."(p.338)

容は不明である。いずれにせよ、文全体で pivot が一つしかなく、かつ、 \emptyset 格名詞が複数箇所と同時に生起可能であることに対して納得のいく説明をおこなうためには、素性の継承や浸透に関する何らかの操作が必須である。

4.3. Wunderlich(2000d)の分析

Wunderlich(2000d)は、素性の継承という考えを明示的に導入し、(66)~(68)に対する詳細な分析を施した。そこでは、以下のような継承の原則と新たな制約が挙げられている。

- (71) a. Genitive Inheritance: All arguments in the scope of a predicate marked for [+G] inherit the feature [+G].
 b. Partitive Inheritance: All arguments in the scope of a predicate marked for [+part] inherit the feature [+part].
 c. *AllGen: All arguments in the scope of a predicate whose highest argument is subject to *SingleGen (i.e., is blocked for genitive) are also blocked for genitive.

(72) MAX(+G) » MAX(+part), *AllGen, *1gen » MAX(+hr) » *gen^{*68}

新しい制約(71)c.は、Wunderlich(2000d)が提示した他の制約の多くと同じように、特定の格形を禁じるものであり、やはり、格を素性に分解したこととの結びつきが弱い。また、Wunderlich自身もこの制約の性質が特定できていないようである^{*69}。

Wunderlich(2000d)の分析では、3つのタイプの複文のうち、*pakottaa* タイプと *antaa* タイプについては、正しい格形を予想することができるが、*haluta* タイプについては完全ではない。Wunderlich(2000d)は、(68)のような言語データに基づいて、(71) a.の Genitive Inheritance が完遂された(73)のような意味構造を想定している^{*70}。

(73) $\lambda v \quad \lambda y \quad \lambda x \quad \{\text{WANT}(x, \text{SEE}(y, v))\}$
 +hr +hr -hr
 +G +G

この意味構造に(72)の制約が課された結果が以下である。

*68 単文の分析において提示された制約も含めれば、以下が“完全な”制約(順位)であろう:

MAX(+G) » MAX(+part) » *acc/N, *gen/pl, *part/b, *AllGen, *1gen » MAX(+hr) » *gen

*69 "The formal status of this constraint is still unclear." (fn.4)

*70 (68)a.の場合。

(74)

v y x	MAX(+G)	MAX(+part)	*AllGen	*SingleGen	MAX(+hr)	*gen
gen acc nom	*!					*
☞ gen gen nom						**
nom acc nom	**!				*	
nom gen nom	*!				*	*
gen nom nom	*!				*	*
nom nom nom	**!				**	

また、NO 構文においては*AllGen や*SingleGen の違反、そして、否定文においては MAX(+part)の違反が現れるが、最も順位の高い制約 MAX(+G)によって、y および v が属格でないものは最初から排除されるため、それらは評価に影響しない*71。

(71)a.と MAX(+G)によって、例(68)が示すように NO 構文や否定文という環境でも全ての項がその格を変えず、属格のままであることを捉えようとしたのだが、フィンランド語の事実はそうではない。文末の単数名詞は、通常の目的語として N 格になっているのである。その証拠に、もしそれが複数普通名詞や人称代名詞であれば、それらは N 格ではなく、T 格で標示される*72。

- (75) a. Halusin sinu-n näkevän karhu-t / *karhu-j-en.
 want-PAST-1SG you-N see-PTC-N bear-T bear-PL-N
 "I wanted you to see the bears."
 b. Halusin sinu-n näkevän häne-t / *häne-n.
 want-PAST-1SG you-N see-PTC-N she-T she-N
 "I wanted you to see her."

N 格(属格)以外の形式は、MAX(+G)違反のために全て*が付き、例(75)のように現れるべき正しい格が除かれ、誤った格が最適なものとして選ばれてしまう。

(76)

v y x	MAX(+G)	MAX(+part)	*AllGen	*SingleGen	MAX(+hr)	*gen
⊗ gen gen nom						**
nom gen nom	*!				*	*
acc gen nom	*!					*

素性継承の存在を訴えたまでは評価できるが、Wunderlich(2000d)の分析が予測

*71 Wunderlich(2000d)の(21)b.および c.を参照。

*72 後掲の例文(87)も参照。

するものがフィンランド語の事実と合致せず、その不備が露顕することとなる。

4.4. 本稿の提案

では、問題の複文において、“本当は”どのようなことが起きているのであろうか。本節では、表(69)のような格の分布が、統語格の継承を仮定することで、前章で提案した格の素性規定と制約によって正しく導き出されることを示す。

(66)~(68)では、先の(69)でまとめたような構造格の分布が観察される。各々の述語の意味構造は概略以下のようなようになる^{*73}。

- (77) NP_x V NP_y Non-Finite NP_v
- a. *pakottaa* タイプ(66): $\lambda v \lambda y \lambda x \{FORCE(x,y,SEE(y,v))\}$
 - b. *antaa* タイプ(67): $\lambda v \lambda y \lambda x \{ALLOW(x,y,SEE(y,v))\}$
 - c. *haluta* タイプ(68): $\lambda v \lambda y \lambda x \{WANT(x,SEE(y,v))\}$

(77)の意味構造、および、Control 構文や ECM(Exceptional Case Marking)構文に対する一般的な分析、そして、Kiparsky(2001)の詳細な議論をもとにすると、NP_y は:

- (78) a. *pakottaa* タイプ: 主節の目的語
b. *antaa* タイプ: 主節の目的語
c. *haluta* タイプ: 従属節の主語

と認められる。また、*antaa* タイプの NP_y は常に N 格で標示されるが、これについても主節動詞が固有格(inherent oblique case)を付与するという Kiparsky(2001:358)の考えに異論はない。

では、はじめに *pakottaa* タイプについて考えよう。NP_y は単文における R-object と同じように振る舞うので、単純に R-object として扱うことができる。一方、NP_v は従属節内の環境が変わっていないように思われるにもかかわらず、NP_y と同じように格交替をする。それは、あたかも、NP_v も主節の R-object であるかのようである。このような振る舞いは、同種の従属節がいくつ埋め込まれていても観察される。もっとも深い従属節の目的語でさえ、最上位にある主節の環境によって、その格形を決定する。つまり、主節の状態が何らかの形で、連鎖的に従属節に伝達して行くと考えられる。実際、Kiparsky(2001)や Wunderlich(2000d)も、格に関わる情報の「連鎖」や「継承」について暗示または明言しているように、これは主格形目的語を対象とした研究におい

*73 Wunderlich(2000d)を参照。

て広く採用されてきた仮説である^{*74}。従って、本稿でも、節から節へ格素性の情報が継承されていると考える。

前章で、「統語格」という概念を設定した。NO 構文においては、最上位の項が existential binding によって“隠され”ても、意味構造での上下関係は不変である。一方で、統語上は目的語が最上位になり[-hr]を与えられ、それにより \emptyset 格目的語の生起が予測できることを示した。表層に主語が顕在しない非定形節においても、同じく最上位の項が“隠されている”と考えることができるだろう。しかし、[-hr]の統語格については、定形節と異なり、それ自身の内部では決定できない。非定形節は様々な点で上位節に依存する。非定形節の隠れた主語が一体何を指すのかは、上位節の情報なしには決まらない。それが上位節の要素にコントロールされるのか、それとも、移動の痕跡なのか、等々。従って、非定形節が[±hr]に関する統語格の付与について上位の(定形)節に依存していると仮定する根拠は十分にあると考えられる。

(79) 統語格の継承

非定形節(内の意味役割)は未決定の統語格を上位の節から継承する。

統語格の継承(79)を前提にすると、*pakottaa* タイプの複文では以下のように格素性が配置される^{*75}。

(80) a. 通常文

λv	λy	λx	{FORCE(x,y,SEE(y,v))}	
+hr	+hr	-hr		
+lr	+lr	+lr		
+hr	+hr			←統語格
↑				
	継承			

b. NO 構文

λv	λy	$\exists x$	{FORCE(x,y,SEE(y,v))}	
+hr	+hr			
+lr	+lr			
-hr	-hr			←統語格
↑				
	継承			

*74 Timberlake(1975:220)、Taraldsen(1986:155)、Maling(1993:66f)を参照。これらの研究においては、非定形節が上位の節から格情報などの特性を引き継ぐ(共有する)と述べられている。また、Kishida(1993)や Nelson(1998:235)も参照。

*75 統語格素性は、意味役割から意味役割へ直接継承されるのではなく、従属節やその主要(機能)範疇などが介在していると考えられるべきかもしれない。本稿では継承に関わる精緻な形式的過程については議論せず、以下では簡略した形でその(結果的な)状態のみを記す。

通常文では、 λy も λv も [+hr, +lr]^{*76}を与えられ、NO 構文では [+hr, +lr, -hr]を持つことになる。従って、 λy においても λv においても、単文の R-object と全く同じように、(53)および(65)の表が、(69)a.の格形をすべて正しく予測する。

次に *antaa* タイプに移ろう。このタイプでは(69)b.のように格が現れる。NP_y は常に N 格で現れ、NP_v は上で考察した *pakottaa* タイプの NP_v と同じ格分布を示す。先述したように、NP_v は動詞 *antaa* から固有格として N 格を与えられる。正確に言えば、格素性として [+lr] が指定される。従って、当該の文の意味構造は以下ようになる。

(81) a. 通常文

λv	λy	λx	{ALLOW(x,y,SEE(y,v))}
	+lr		←固有格
+hr	+hr	-hr	
+lr		+lr	
+hr	+hr		←統語格
↑			
	継承		

b. NO 構文

λv	λy	$\exists x$	{ALLOW(x,y,SEE(y,v))}
	+lr		←固有格
+hr	+hr		
+lr			
-hr	-hr		←統語格
↑			
	継承		

λy も λv も、通常の文では [+hr, +lr]、NO 構文では [+hr, +lr, -hr]であるが、 λy においては、[+lr]が固有格であることが λv と異なる。 λv は R-object と全く同じ格の交替を示すが、 λy に関しては、特別に与えられた格素性を可能な限り実現させるようにするために、以下のような制約が必要となる。

(82) MAX(lexF)

固有格として(語彙的に)与えられた素性は、形態格でもそれを保持する^{*77}。

この制約がなければ、特定の格をわざわざ指定した意味がなくなる。また、この制約は順位においても上位になければならない。

*76 注 61 を参照。

*77 cf. Wunderlich(2000b)

MAX(lexF): Every lexically assigned feature in the input has a correspondent in the output.

(83) 固有格[+lr]を持つ λy

	MORPH REAL	MAX(lexF)	MAX(-lr) /+hr	MAX(+hr)	* α lr/-hr	MAX(+lr)	*+hr
a. [+hr, +lr] <i>karhu-n, karhu-j-en, häne-n</i>							
- \emptyset []	[*!]	*!		*		*	
-T[+hr]	(*!)	*!				*	*
ϕ -N[+lr]				*			
-TA[-lr]		*!		*		*	
b. [+hr, +lr, -hr] <i>karhu-n, karhu-j-en, häne-n</i>							
- \emptyset []	[*!]	*!		*		*	
-T[+hr]	(*!)	*!				*	*
ϕ -N[+lr]				*	*		
-TA[-lr]		*!		*	*	*	

※ [*!]は普通名詞複数形の時、(*!)は普通名詞単数形の時

最後に *haluta* タイプについてであるが、この文の構造は、先の2つのタイプとは異なる。NP_y は主節の目的語ではなく、非定形従属節の主語である^{*78}。非定形節自身に主語 NP_y が顕在するので、統語格についても従属節内で決まる。つまり、未決定の統語格がないため、継承は起こらない。また、NP_y は非定形動詞の主語として常に N 格であるため、内在的に[+lr]が与えられていると考えられる^{*79}。従って、*haluta* タイプの意味構造は以下のように設定される^{*80}。

(84) a. 通常文

λv	λy	λx	{WANT(x,SEE(y,v))}
	+lr		←固有格
+hr	-hr	-hr	
+lr		+lr	

*78 (77)c.および(78)c.を参照。このタイプの構文は、*referatiivirakenne* と呼ばれる。

*79 一般的に固有格(内在格・語彙格)は、特定の語彙によって主題役割と連動して与えられると考えられている。非定形節内の主語を標示する N 格は、特定の述語によってもたらされたものではない。(ただし、斜格「主語」を有する存在文や所有文などが埋め込まれた場合、「主語」は N 格にはならず、元の斜格を保持する;注 89 参照。)従って、[+lr]が非定形節の主語に内在的(語彙的)に付与される「固有格」であるとするのは正確ではないが、本稿では、非定形動詞の主語を標示する N 格を(構造的な)「固定格」と広義に解釈しておく。属格-n が指定部における既定の格であると仮定している Vainikka(1989, 1993)も参照されたい。

*80 継承の有無にかかわらず、統語格もちろん付与されるが、それは、通常の文でも NO 構文でも抽象格と同じ値であるので省略する。

b. NO 構文

$\lambda v \quad \lambda y \quad \exists x \quad \{WANT(x, SEE(y, v))\}$
 $\quad \quad \quad +lr \quad \quad \quad \leftarrow \text{固有格}$
 $+hr \quad -hr$
 $+lr$

haluta タイプの構文では、統語格の継承が起こらないために、NO 構文でも λv は [+hr, +lr] のままであり、[-hr] の指定を受けない。このことは、 λv に \emptyset 格が現れないことを正しく予測する。また、 λy は非定形動詞の主語として固定値の [+lr] が与えられ、そして、従属節内の最上位要素として自動的に [-hr] が加わる。制約 MAX(lexF) により、 λy は他の格を退けて常に N 格で標示されることになる。

Wunderlich(2000d)は、属格と同様の素性継承を分格についても仮定しているが、素性の機械的な継承だけでは現実の言語データを説明するに十分ではない。文中のどこかに否定要素があれば、随意的に分格が現れるわけではないため、意味構造や統語構造に関して満たすべき必要条件はあるであろう。しかし、それが十分条件となって機械的に分格(本稿では [-lr]) が与えられたり、継承されたりするとは言えない。Kiparsky(2001)が述べるように、(66)~(68)の否定文における格のパターンはいくつかの要因で変わる可能性がある^{*81}。例えば、*haluta* タイプの否定文(68)c.では NP_v に N 格が現れているが、次のように分格形の目的語を持つ文も存在する^{*82}。

(85) En sanonut häne-n suorittaneen työ-tä.
 NEG-1SG say-PTC he-N perform-PTC-N task-P
 "I did not say him to have performed the task."

(否定文の)分格がどのような場合にどのようにして与えられるのかは、(機械的でない)格の継承とも合わせて考えていかなければならないが、一旦 [-lr] が与えられた後は、本稿が提唱する一連の制約が、現れるべき時に分格を確実に予測するのは間違いない^{*83}。

4.5. その他の非定形節

次の(86)のような非人称文も NO 構文のひとつに数えられる^{*84}。

*81 "As is normally the case with negation, there is quite a bit of variation (depending on scope, presupposition, and probably other factors)..."(p.357)

*82 Timberlake(1975:224)を参照。

*83 Wunderlich(2000d)では、(75)と同様に、(85)のような文の適格性も予測できない。

*84 (86)のような構文は *nessessiivirakenne* "necessive construction" と呼ばれる。

- (86) a. Sinu-n on helppo ampua tämä karhu.
 you-N is.3SG easy shoot-INF this-Ø bear-Ø
 "It is easy for you to shoot this bear."
- b. Maija-n täytyy avata ovi.
 Maija-N must.3SG open-INF door-Ø
 "Maija must open the door."
- c. Sinu-n pitäisi tuoda heidä-t kotiin.
 you-N should-COND.3SG bring-INF they-T home
 "You should bring them home."

(86)a.で文頭の *sinu-n* は、非定形動詞 *ampua* の統語的主語ではなく、形容詞 *helppo* の項である*⁸⁵。従って、非定形節では統語格を内部で決定できないため、その目的語は、非人称文で統語的主語がない上位節から統語格素性[-hr]を継承することになり、結果として Ø 格が現れる。(86)b.,c.における文頭の N 格名詞の地位については見解が分かれるところであるが*⁸⁶、たとえ非定形節の主語として発していたとしても、表層上は単純に非定形節内の主語であるとは認め難い*⁸⁷。故に、a.と同様、従属節は、顕在的な主語を持たず、目的語が[-hr]を引き継ぐことになると考えられる。

Asudeh(2003:185f)は、例(87)a.において N 格形が出現することが自身の理論では予見できないと述べている。しかも、通常は Ø 格よりも N 格が好まれる*⁸⁸。

- (87) a. Uolevi-n väitetään saavan palkankorotus / palkankorotukse-n.
 Uolevi-N claim-PASS get-PTC-N raise-Ø raise-N
 "Uolevi is claimed to receive a raise."
- b. Uolevi-n väitetään saavan palkinno-t / *palkinto-j-en.
 Uolevi-N claim-PASS get-PTC-N awards-T awards-PL-N
 "Uolevi is claimed to receive the awards."
- c. Uolevi-n väitetään omistavan sinu-t / *sinu-n / *sinä.
 Uolevi-N claim-PASS own-PTC-N you-T you-N you-Ø
 "Uolevi is claimed to own you."

(87)は、*haluta* タイプの NO 構文である。文頭の N 格名詞は、従属節の主語であり、

*85 Kiparsky(2001:33)などを参照。

*86 非定形動詞の主語なのか、あるいは主節定動詞の主語なのか、それとも、副詞的要素なのか、という疑問である。Ikola(1978)、Hakulinen & Karlsson(1979:158, 172)、Vilkuna(1989:152, 260)、Laitinen & Vilkuna(1993)、Pylkkänen(1998:8)、Sands & Campbell(2001:274)を参照。

*87 Pylkkänen(1998:10)は、文頭の N 格名詞句が(統語的な手続きによるものではないが)主節動詞と主題関係(thematic relation)を担うと主張する。これは、当該の名詞句が単なる非定形従属節の主語ではないことを示唆する。

*88 Vilkuna(2000:298)および Vainikka(2003)を参照。

単に主題として文頭に位置しているにすぎない。従って、離れてはいるが、統語的主語を持つ従属節は自己の節内で統語格としての[+hr]を保持するため、[-hr]を継承する必要がなく、目的語は通常通り N/T 格で標示される。しかし、文頭の N 格名詞が単なる従属節の主語ではなく、(86)のような構文と並行的に解釈されるようならば(このような解釈は普通ではないと思われる)、従属節は主語を失い、上位の不定人称受動文より[-hr]を継承することになり、その結果、単数普通名詞は \emptyset 格の形をとる。目的語が複数名詞や代名詞である時は、[-hr]の有無に関係なく、T 格で標示され、N 格や \emptyset 格になることはない。これは、(87)の事実とまったく対応している。従って、Asudeh(2003)にとって課題として残った(87)は、本稿では問題なく処理できる*⁸⁹。

逆に、下の例(88)では *häne-n* が非定形動詞 *täytyvän* の“元通り”の主語として解釈され、統語格の継承がなくなり、文末の普通名詞は N 格で表される*⁹⁰。

- (88) *Luulen häne-n täytyvän pestä lattia-n / *lattia.*
 think-1SG he-N must-PTC-N wash-INF floor-N floor- \emptyset
 "I think that he must wash the floor."

*⁸⁹ 統語格継承の存否によって、次のように従属節が(i)所有文や(ii)存在文である場合に観察される「目的語」の格交替も同様に予測できると思われるが、そのためには、NP_yに相当する斜格「主語」が従属節の主語として解釈されたり、されなかったりする理由をまず明らかにしておくなければならない。

- (i) *Jukka väitti sinu-lla olevan uusi auto / uude-n auto-n.*
 Jukka claim-PAST.3SG you-ADE be-PTC-N new- \emptyset car- \emptyset new-N car-N
 "Jukka claimed (that) you have a new car."
 (ii) *Luulisin järve-ssä olevan vielä ainakin yksi ahven / yhde-n ahvene-n.*
 believe-COND-1SG lake-INE be-PTC-N yet at-least one- \emptyset fish- \emptyset one-N fish-N
 "I believe (that) there is yet at least one fish in the lake."

Vainikka(2003:251)は、主節と従属節のどちらの述語が格形の決定に関与するののかによって、格形に違いが現れると提案しているが、どのような場合にどちらの述語が関与するののかについては具体的に述べていない。また、次の(iii)や(iv)のような *predicative construction* に関しては、従属節だけでなく、主節(独立文)として生起している場合についても、「補語」の格がどのようにして決まるのかという基本的な過程を検討しなければならないが、これは今後の課題である。Hakulinen & Karlsson(1979:363ff)、Comrie(1997:45, 47)、Viikuna(2000:293ff)、Löbel(2000)、Vainikka(2003)を参照。

- (iii) *Tiedän kirja-n olevan valkoinen / valkoise-n.*
 know-1SG book-N be-PTC-N white- \emptyset white-N
 "I know (that) the book is white."
 (iv) *Tiedän pallo-n olevan lelu / ?lelu-n.*
 know-1SG ball-N be-PTC-N toy- \emptyset toy-N
 "I know (that) a ball is a toy."

*⁹⁰ (86)b.と比較。Timberlake(1975:225)によると、(88)は"archaic"と感ぜられるそうである。

このように、新たな制約を追加せずとも、統語格の継承を前提とすれば、非定形節全般における構造格について統一的に説明ができる。

下の例は、独立した非定形節である。ここでも、単数普通名詞の目的語は \emptyset 格で標示され、複数普通名詞や人称代名詞は T 格で標示される。つまり、あたかも、上位に NO 構文の節が存在し、そこから統語格[-hr]を継承しているかのように振る舞う。

(89) Jättää nyt lapsi / häne-t yksin kotiin.
leave-INF now child- \emptyset she-T alone home
"To leave a child/her at home."

しかし、実際には上位の節がないため、統語格も継承できない。その場合は、既定値 (default) として[-hr]の指定を受けると考えたい。そうすれば、(89)で N 格ではなく \emptyset 格が用いられることが説明できる。

同様に、非定形節が名詞の補部になっているときも、普通名詞単数の目的語が \emptyset 格で標示される。非定形節を直接支配する節が存在しないため、ここでも既定値として[-hr]が付与されると考えればよい。

(90) Perheenäiti sai mahdollisuude-n luoda turvallinen koti.
housewife- \emptyset get-PAST.3SG opportunity-N creat-INF safe- \emptyset home- \emptyset
"The housewife got the opportunity to create a safe home."

以上、本稿が提案する格の素性規定および制約によって、非定形従属節を持つ3タイプの構文に観られる複雑な格の出現が適切に導き出されることを示した。主格目的語に対する従来の研究において、多様な形で提示されてきた素性の継承という考え方を、統語格の継承として具体的に導入することで、Kiparsky(2001) や Wunderlich(2000d)では説明が十分ではなかった、これらの複文について、単文と同じ手続きで格の分布を予測できることを証明した。

5. まとめと展望

本稿では、Kiparsky(2001) および Wunderlich(2000d)によるフィンランド語の構造格に対する研究を背景とし、意味構造における相対的位置づけをもとに与えられることを基本とする形式素性が抽象格と形態格、および新たに導入された統語格を特徴付け、そして、特定の順位で課される一連の違反可能な制約により、それらの異なるレベルの格が適切に対応づけられることを論じた。これは、上記の先行研究における方法論の妥当性をさらに裏付けることにつながる。

る場合に対応する。(93)c.は、人称代名詞の対格のために必要十分な属性である。
さらに、複数属性を保つ T 格には異形態が存在する可能性がある。

- (94) a. Otan tuo-n kirja-n / nuo kirja-t pöydältä.
take-1SG that-N book-N those-Ø(?) book-T table-ABL
"I'll take that book / those books from the table."
b. Ota tuo kirja / nuo kirja-t pöydältä!
take-IMP that-Ø book-Ø those-Ø(?) book-T table-ABL
"Take that book / those books from the table!"
c. Otan se-n / ne pöydältä.
take-1SG it-N they-Ø(?) table-ABL
"I'll take it / them from the table."
d. Ota se / ne pöydältä!
take-IMP it-Ø they-Ø(?) table-ABL
"Take it / them from the table!"

上例で使われている指示代名詞は、単数と複数で語幹(語根)が異なる:

- (95) tämä — nämä、 tuo — nuo、 se — ne
this these that those it they

単数の指示代名詞は、普通名詞単数形と同じように格の交替を示す、つまり、通常の文においては N 格、NO 構文では Ø 格で標示される。ところが、複数の指示代名詞は、通常の文でも NO 構文でも接辞なしで現れる。複数指示代名詞には N 格形がある^{*91}ので、これが形態上の制限によるものでないのは明らかである。どちらの文においても同じ形式だという点は、複数普通名詞の T 格と全く同じである。つまり、複数指示代名詞の -Ø 接尾辞は、音声形式がゼロであることを除いて、複数普通名詞の -t と同じ分布をしている。従って、複数指示代名詞の -Ø は複数普通名詞の -t と異形態の関係にあると考えてよいだろう。T 格は、語幹自体が [+pl] を持つときに -Ø 形式になると考えればよいかもしれない^{*92}。

なお、この複数指示代名詞が Kiparsky(2001)が定式化した Jahnsson's Rule(40)に対する反例となることを指摘しておこう。例えば、文(94)c.において、単数の指示代名詞 *se-n* は N 格で標示されているが、複数の指示代名詞 *ne* は接辞を備えていない、つまり、NP-Ø の形で現れている。単数では、Ø 形が JR に違反するので、対立候補

*91 各々、*näide-n*, *noide-n*, *niide-n* である。

*92 複数指示代名詞に接辞 -t は付かない: **nämä-t*/**näide-t*/**näidä-t* など。なお、エストニア語では同源の代名詞に複数接辞 -d が後続し、これは本文の仮定にとって傍証となるかもしれない: *tema/ta* "he, she, it" — *nema-d/na-d* "they", *see* "this, that" — *nee-d* "these, those".

の N 格(属格)が最終的に選ばれる。しかしながら、普通名詞の複数形が有形の接辞 -t を持つことで JR の違反を免れ、最終候補となるのは異なり、NP- \emptyset の形をとる指示代名詞の複数形 *ne* は、明らかに(40)の JR に違反しており、単数形の場合と同じように最終候補としては残らないはずである^{*93}。従って、Kiparsky(2001)が提案する Jahnsson's Rule(40)は、(94)の事実を正しく捉えることができない^{*94}。

さまざまな顔を持つ T 格を、上述のように複雑な内容を持つと考えなければならぬのは、特に複数形の普通名詞を考慮に入れた場合である。人称代名詞においては、[+hr]のみが必要十分な特性である。両者の相違を重視するならば、T 格を再び分離して、純粋な対格専用の T₁ 格と複数主格・対格の T₂ 格の2つを認め、前者は [+hr]、後者は [+hr, +pl] で規定され、後者には /-t/ と /- \emptyset / の異形態がある、というように考えるべきかもしれない。この改変は、制約の評価手順に関わってくる可能性もあるため、その是非については今後の課題としたい。

*93 Kiparsky(2001:364)の(89)を参照。特に 1a-d.と 7a-d.を比較されたい。

*94 次のような目的語に現れる数詞の形も、Kiparsky(2001)や Asudeh(2003)の JR にとって反例となるだろう。(Asudeh 2003 による JR の定義については、注 47 を参照。)

- (i) Me luimme yhde-n kirja-n / *yksi kirja.
we read-PAST-IPL one-N book-N one- \emptyset book- \emptyset
"We read one book."
- (ii) Me luimme *kahde-n kirja-n / kaksi kirjaa.
we read-PAST-IPL two-N book-N two- \emptyset (?) book-P
"We read two books."
- (iii) Me luettiin yksi kirja / kaksi kirjaa.
we read-PASS.PAST one- \emptyset book- \emptyset two- \emptyset (?) book-P
"We read one book / two books." (colloquial)

例(i)のように、数詞「1」は単数普通名詞と同じように、通常の文では N 格で標示されるが、例(ii)が示すように、「2」以上の数詞は N 格ではなく \emptyset 格と同じ形をとる。「2」以上の数詞にも、N 格があり、これは形態的な制限によるものではない。ところが、この形は本稿でも予測できない。また、この- \emptyset 接辞を複数指示代名詞と同じように T 格の異形態と見なすこともできない。例(iv)のように、数詞は、T 格の形式も備えているからである(*plurale tantum* の例)。例(ii)や(iii)では「2」に後続する名詞が単数分格になるのに対し、例(iv)では数詞ともども T 格である点も異なっている。

- (iv) Minulla on kahde-t sakse-t.
I-ADE is.3SG two-T scissors-T
"I have two pairs of scissors."

本稿や JR によると、通常の文において、形態の上では単数形であると思われる「2」以上の数詞には N 格が用いられると予測されるが、これは上で例示した現実のデータと一致しない。この問題に対する具体的な解決案を本稿はまだ持ち合わせていないが、接尾辞のない目的語を対格ではなく主格と見なすの分析においても、難問となる事実であることを指摘しておきたい。Nelson(1998:182)、Reime(1993:106ff)、Vainikka(2003:fn.34)を参照。

[Appendix 1]

名詞の格変化表(伝統文法)

	普通名詞 'bear'		人称代名詞 'you'	
	単数	複数	単数	複数
主格 (NOMinative)	karhu	karhu-t	sinä	te
対格 (ACCusative)	karhu, karhu-n	karhu-t	sinu-t	te-i-dä-t
属格 (GENitive)	karhu-n	karhu-j-en	sinu-n	te-i-dä-n
分格 (Partitive)	karhu-a	karhu-j-a	sinu-a	te-i-tä
様格 (ESSive)	karhu-na	karhu-i-na	sinu-na	te-i-nä
変格 (TRANslative)	karhu-ksi	karhu-i-ksi	sinu-ksi	te-i-ksi
内格 (INEssive)	karhu-ssa	karhu-i-ssa	sinu-ssa	te-i-ssä
出格 (ELAtive)	karhu-sta	karhu-i-sta	sinu-sta	te-i-stä
入格 (ILLative)	karhu-un	karhu-i-hin	sinu-un	te-i-hin
接奪格 (ADEssive)	karhu-lla	karhu-i-lla	sinu-lla	te-i-llä
奪格 (ABLative)	karhu-lta	karhu-i-lta	sinu-lta	te-i-ltä
向格 (ALLative)	karhu-lle	karhu-i-lle	sinu-lle	te-i-lle
欠格 (ABEssive)	karhu-tta	karhu-i-tta	sinu-tta	te-i-ttä
共格 (COMitative)		karhu-i-ne-	—	—
具格 (INSTructive/ INSTrumental)		karhu-i-n	—	—

[Appendix 2]

(i)格形式(構造格)の基本的な分布

		主語	目的語		
			R-object*		I-object
			通常	NO構文	
普通名詞	単数	-Ø	-n	-Ø	-TA
	複数	-t	-t	-t	-TA
人称代名詞		-Ø	-t	-t	-TA

*否定文では I-object に準ずる。

※-TA :-ta, -tä, -a, -ä

(ii)複文における構造格の分布**

NP_x V NP_y Non-Finite NP_v

主節→	通常		NO構文		否定文	
	NP _y	NP _v	NP _y	NP _v	NP _y	NP _v
V= <i>pakottaa</i> タイプ	N/T	N/T	Ø/T	Ø/T	P	P
V= <i>antaa</i> タイプ	N	N/T	N	Ø/T	N	P
V= <i>haluta</i> タイプ	N	N/T	N	N/T	N	N/T

**NP_v の格形は R-object の場合。I-object の場合、NP_v は全て P (分格) で標示される。また、否定文では異なるパターンを示すこともある。

[参考文献]

- Asudeh, A. 2003. A licensing theory for Finnish. In D. Nelson and S. Manninen, eds., 165-199.
- Belletti, A. 1988. Unaccusatives as case assigners. *Linguistic Inquiry* 19:1-34.
- Blake, B.J. 1994. *Case*. Cambridge:Cambridge University Press.
- 千葉庄寿. 1998. 「フィンランド語使役構文の被使役者を表す接格名詞句」『東京大学言語学論集』17号.
- Comrie, B. 1997. The typology of predicate case marking. In *Essays on Language Function and Language Type, Dedicated to T. Givón*, ed. J. Bybee, J. Haiman, and S.A.Thompson, 39-50. Amsterdam:John Benjamins.
- Hakulinen, A. and F. Karlsson 1979. *Nykysuomen Lauseoppi* [Syntax of the Modern Finnish]. Jyväskylä:Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Hakulinen, L. 1961. *The Structure and Development of the Finnish Language*. Bloomington: Indiana University.
- Harris, A.C. and L. Campbell. 1995. *Historical Syntax in Cross-linguistic Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heinämäki, O. 1984. Aspect in Finnish. In *Aspect Bound*, ed. C. de Groot and H. Tommola, 154-177. Dordrecht:Foris Publications.
- Holmberg, A. and U. Nikanne, eds. 1993. *Case and Other Functional Categories in Finnish Syntax*. Berlin:Mouton de Gruyter.
- Holmberg, A., U. Nikanne, I. Oraviita, H. Reime, and T. Trosterud. 1993. The Structure of INFL and the Finite Clause in Finnish. In A. Holmberg & U. Nikanne, eds., 177-206.
- Hoop, H. de. 1989. Case assignment and generalized quantifiers. Ms., University of Groningen.
- Ikola, O. 1978. *Lauseenvastikeoppi* [A Study of Clause Substitutes]. Helsinki:Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Joppen, S. and D. Wunderlich. 1995. Argument linking in Basque. *Lingua* 97:123-169.
- Kager, R. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Kayne, S. 1984. *Connectedness and Binary Branching*. Dordrecht:Foris Publications.
- Kiparsky, P. 1988. Partitive case and aspect. In *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, ed. B. Miriam and W. Geuder, 265-307. Stanford:CSLI Publications.
- Kiparsky, P. 1992. Structural case. Ms., Institute for Advanced Study, Berlin.
- Kiparsky, P. 1997. The rise of positional licensing. In *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. A. van Kemenade and N. Vincent, 460-494. Cambridge:Cambridge University Press.
- Kiparsky, P. 2001. Structural case in Finnish. *Lingua* 111:315-376.
- Kishida, Y. 1993. Remarks on functional categories and Case license in Finnish. *Linguistic*

- Research 12*, 25-54. Kyoto:Kyoto University Linguistics Circle.
- Laitinen, L. and M. Vilkkuna. 1993. Case-marking in neccessive constructions and split intransitivity. In A. Holmberg and U. Nikanne, eds, 23-48.
- Legendre, G., W. Raymond, and P. Smolensky. 1993. An Optimality-Theoretic typology of case and grammatical voice systems. *BLS* 19, 464-478.
- Legendre, G., J. Grimshaw, and S. Vikner, eds. 2001. *Optimality-Theoretic Syntax*. Cambridge, Mass.:MIT Press.
- Löbel, E. 2000. Case alternation in Finnish copular constructions. In B. Stiebels and D. Wunderlich, eds, 143-171.
- Maling, J. 1993. Of nominative and accusative: The hierarchical assignment of grammatical case in Finnish. In A. Holmberg and U. Nikanne, eds, 49-74.
- Marcantonio, A. 1988. On the case of the object in Finnish: a typological, diachronic and comparative analysis. *FUF* 48:129-170.
- Matsumura, K. 1994. Is the Estonian adessive really a local case? In *Journal of Asian and African Studies* 46/47, 223-235.
- McCarthy, J. and A. Prince. 1995. Faithfulness and reduplicative identity. In *Papers in Optimality Theory (University of Massachusetts Occasional Papers 18)*, ed. J. N. Beckman, L. Walsh, and S. Urbanczyk, 249-384.
- Milsark, G. 1985. Case Theory and the grammar of Finnish. *NELS* 15:319-331.
- Nakamura, W. 1999. An Optimality-Theoretic account of the Japanese case system. *Studies in Language* 23:597-649.
- Nelson, D. C. 1998. *Grammatical Case Assignment in Finnish*. New York:Garland.
- Nelson, D. and S. Manninen, eds. 2003. *Generative Approaches to Finnic and Saami Linguistics*. Stanford:CSLI Publications.
- Prince, A. and P. Smolensky. 1993. *Optimality Theory*. Technical Report CU-CS-696-93, Department of Computer Science, University of Colorado at Boulder.
- Pylkkänen, L. 1998. The Finnish object and v. Ms., MIT.
- Reime, H. 1993. Accusative marking in Finnish. In A. Holmberg and U. Nikanne, eds, 89-109.
- Sands, K. and L. Campbell. 2001. Non-canonical subjects and objects in Finnish. In *Non-Canonical Marking of Subjects and Objects*, ed. A.Y. Aikhenvald, R.M.W Dixon, and M. Onishi, 251-305. Amsterdam:John Benjamins.
- Shore, S. 1988. On the so-called Finnish passive. *Word* 39:151-176.
- Stiebels, B. 2000. Linker inventories, linking splits and lexical economy. In B. Stiebels and D. Wunderlich, eds, 211-245.
- Stiebels, B. and D. Wunderlich, eds. 2000. *Lexicon in Focus*. Berlin:Akademie Verlag.

- Taraldsen, T. 1986. On the distribution of nominative objects in Finnish. In *Features and Projections*, ed. P. Muysken and H. van Riemsdijk, 139-161. Dordrecht:Foris Publications.
- Timberlake, A. 1975. The nominative object in Finnish. *Lingua* 35:201-230.
- Toivainen, J. 1993. The nature of the accusative in Finnish. In A. Holmberg and U. Nikanne, eds, 111-128.
- Vainikka, A. 1989. *Deriving Syntactic Representations in Finnish*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts.
- Vainikka, A. 1993. The three structural cases in Finnish. In A. Holmberg and U. Nikanne, eds, 129-162.
- Vainikka, A. 2003. Postverbal case realization in Finnish. In D. Nelson and S. Manninen, eds., 235-266.
- Vainikka, A. and J. Maling. 1996. Is partitive case inherent or structural? In *Partitives: Studies on the Syntax and Semantics of Partitives and Related Constructions*, ed. J. Hoeksma, 179-208. Berlin:Mouton de Gruyter.
- Vilkuna, M. 1989. *Free word order in Finnish: Its syntax and discourse function*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Vilkuna, M. 2000. *Suomen Lauseopin Perusteet* [The Foundations of Finnish Syntax]. Helsinki: Edita.
- Woolford, E. 2001. Case patterns. In G. Legendre, J. Grimshaw, and S. Vikner, eds, 510-541.
- Wunderlich, D. 1997. Cause and the structure of verbs. *Linguistic Inquiry* 28:27-68.
- Wunderlich, D. 2000a. Predicate composition and argument extension as general options - a study in the interface of semantic and conceptual structure. In B. Stiebels and D. Wunderlich, eds, 247-270.
- Wunderlich, D. 2000b. The force of lexical case: German and Icelandic compared. In *The Nature of the Word: essays in honor of Paul Kiparsky*, ed. K. Hanson and S. Inkelas. Cambridge, Mass.:MIT Press. To appear.*
- Wunderlich, D. 2000c. Optimal case patterns: German and Icelandic compared. In *New Perspectives on Case Theory*, ed. E. Brandner and H. Zinsmeister. Stanford:CSLI Publications. To appear.*
- Wunderlich, D. 2000d. Reconsidering structural case in Finnish. Ms., University of Düsseldorf.*
- Wunderlich, D. 2000e. Optimal case in Hindi. Ms., University of Düsseldorf.*
- Wunderlich, D. and R. Lakämper. 2001. On the interaction of structural and semantic case. *Lingua* 111:377-418.

*次の Web サイトで入手可: <http://web.phil-fak.uni-duesseldorf.de/~wdl/>

An Analysis of Finnish Structural Cases by Feature Decomposition

KISHIDA, Yasuhiro

Abstract

In this paper, I attempt to promote an analysis of Finnish structural cases by feature decomposition as proposed in Kiparsky(1992, 2001), and conclude that the distribution of structural cases, one of the much discussed issues in the literature, is systematically explained in line with Optimality Theory.

In Finnish, subjects and objects can bear alternative cases depending on their nominal properties as well as on their syntactic and semantic environments. First, I illustrate a descriptive generalization that each nominal expression (a noun or pronoun) may be potentially assigned more than one (abstract) case, with a sort of realization hierarchy of cases determining which morphological case ending will surface on the given nominal. In his 2001 paper, Kiparsky convincingly shows that the traditional accusative suffix *-n* of singular common noun should be identified as genitive characterized by the same morph. Furthermore, I argue that, by unifying the traditional nominative/accusative form of plural common noun with the pronominal accusative *-t*, the supposed hierarchy of case realization can be reformulated to improve its empirical generality.

To provide the above generalization with a more explanatory force, the formal definition of the Finnish structural cases by relational features is introduced, which is motivated by Kiparsky and adapted by Wunderlich. The featural definition of abstract, morphological, and newly-assumed syntactic cases enables us to account for the assignment and realization of cases more adequately than the aforementioned descriptive hierarchy. Following Kiparsky(2001) and Wunderlich(2000d), I propose Optimality-theoretic violable constraints imposed on morphologicalization, with their ranks incorporating the idea of case hierarchy. These constraints predict the correct appearances of the Finnish structural cases endowed with different feature specifications from the ones posited in the previous works.

(受理日 2003 年 8 月 22 日 最終原稿受理日 2003 年 12 月 5 日)